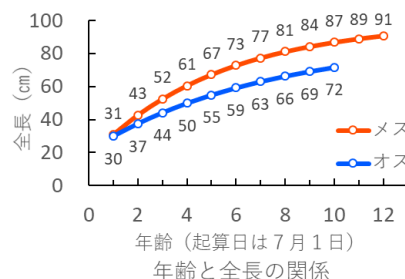


ヒラメ〔地方名：そげ、はが、こばら（小型）〕

1 生態

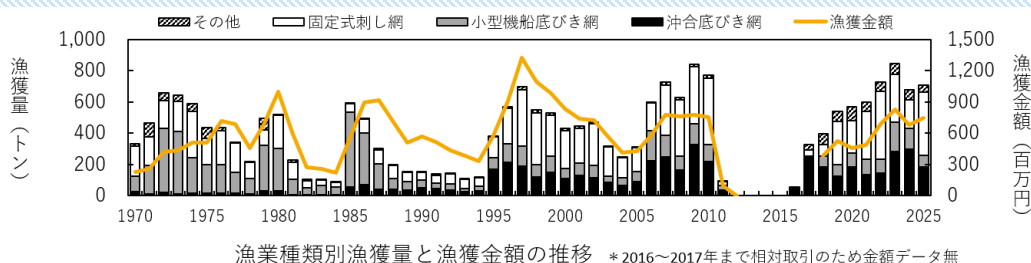
- ・日本各地沿岸の水深150m以浅、粗砂及び砂礫域に生息します。夏季は産卵期のため沿岸へ、冬季は沖合へ移動します。
- ・オスは満2歳、メスは満3歳で成熟魚が見られます。全長ではオス35cm、メス44cmで成熟します。産卵期は5～8月で、産卵様式は数十回に分けて行う多回産卵型です。
- ・成魚は主にイワシ類等の魚類、幼魚期はアミ類等の甲殻類を食べます。

*「令和5（2023）年ヒラメ太平洋北部系群の資源評価」により右図を作成



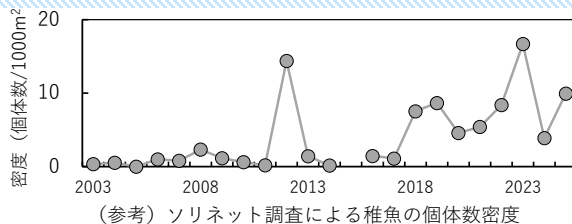
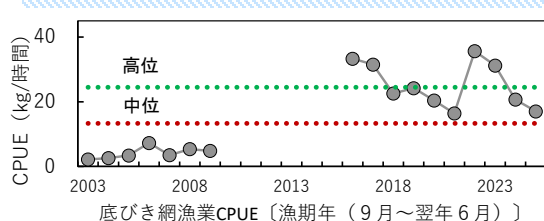
2 漁業に関する情報

- ・沖合底びき網及び小型機船底びき網や刺し網、釣り等で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は704トン、金額は745百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2016年（平成28年）10月から漁獲が再開され、漁獲量、金額は震災前の規模まで増加しています。



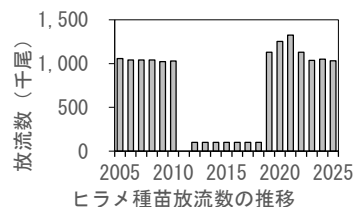
3 資源の状態

- ・原発事故の影響により操業が限定されている中、震災以降、底びき網漁業のCPUE（曳網1時間あたりの漁獲量）は、中位～高位で推移しています。
- ・2025年（令和7年）漁期の資源水準は中位で、資源動向は減少傾向にあります。
- ・毎年7～10月に実施する調査船によるソリネット調査の結果、2018年（平成30年）以降、0歳稚魚の個体数密度は高位で推移しており、良好な加入が継続しているものと考えられます。



4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・漁業者が自主的に水揚げ全長を制限（相双地区50cm以上、いわき地区40cm以上）し、資源の有効利用を図っています。
- ・栽培漁業対象種として、毎年約100万尾の種苗を県内各地で放流しています。
- ・ヒラメ太平洋北部系群ではTAC管理の導入に向けた検討が進められています。

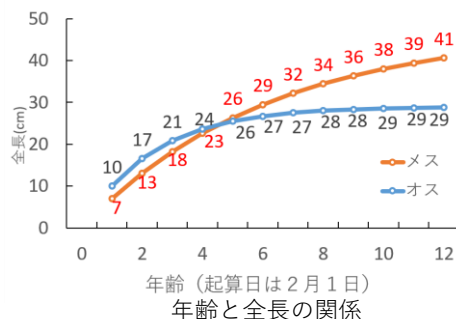


アカガレイ

1 生態

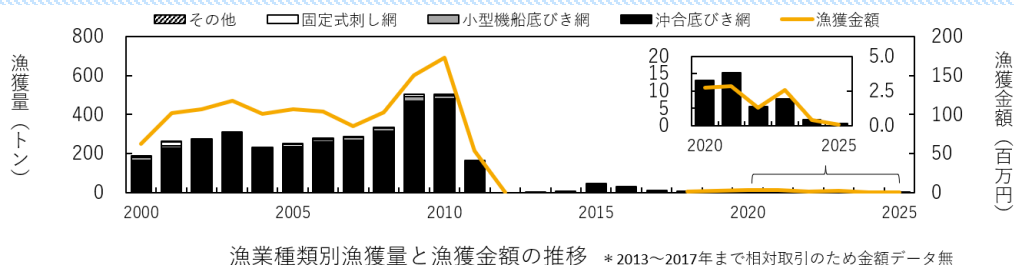
- ・茨城県以北、日本海、オホーツク海に分布し、常磐海域では主に水深100～600mに生息します。季節的な深浅移動を行い、1～3月には水深100～200mの海域で多く漁獲されます。産卵期に沿岸への冷水波及が強い年は、100m以浅への移動、分布が強まります。
- ・メスは5歳で36%、6歳で67%、8歳以上でほとんどの個体が成熟します。オスは満2歳から成熟します。産卵期は2～4月です。
- ・クモヒトデ類、オキアミ類、ホタルイカモドキ類、ハダカイワシ類等を食べます。

* 福島県水試研究報告第13号（2006）により右図を作成



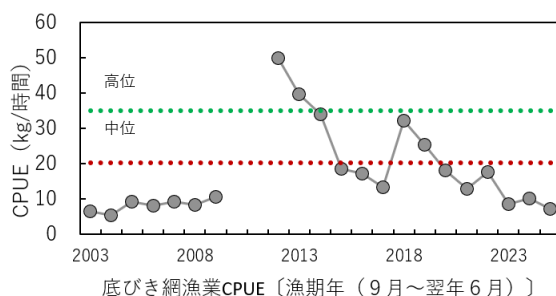
2 漁業に関する情報

- ・主に沖合底びき網で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は0.4トン、金額は0.08百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2013年（平成25年）10月から再開されています。



3 資源の状態

- ・資源の水準：低位、資源の動向：減少
- ・底びき網漁業のCPUE（曳網1時間あたりの漁獲量）は、2013年漁期から減少し、2018年漁期に増加が見られましたが、その後減少に転じ、2020年漁期以降は震災前と同程度の低水準に推移しています。



4 資源管理の取組・その他のトピック

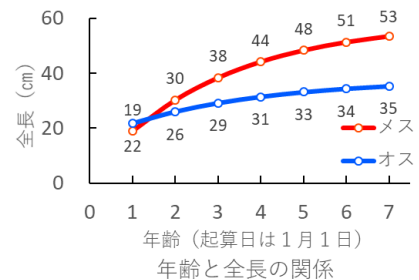
- ・現在、実施されている取り組みはありません。

イシガレイ

1 生態

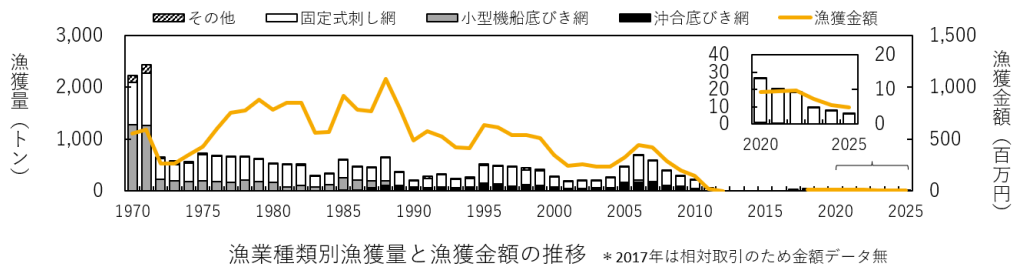
- ・日本各地沿岸の水深100m以浅に生息します。福島県では、稚魚は松川浦などの内湾や水深15m以浅の砂浜に分布し、成長とともに水深15～100mの海域に移動します。
- ・オスは2歳で全て成熟します。メスは2歳で70%、3歳で全てが成熟します。産卵期は12月で、産卵期には水深20～50mの海域に移動します。
- ・稚魚は主に多毛類、成魚はカニ等の甲殻類や二枚貝等の貝類の他、イカナゴなどの魚類を食べます。

* 沿岸域漁業管理適正化方式開発調査最終報告書（1987）により右図を作成



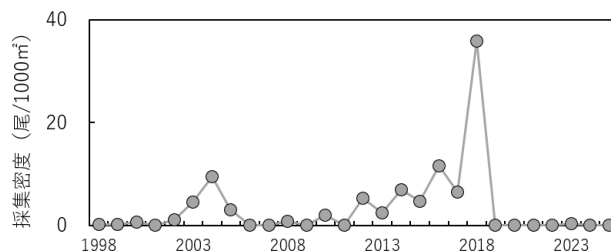
2 漁業に関する情報

- ・沖合底びき網及び小型機船底びき網や刺し網等で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は6.0トン、金額は4.9百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2017年（平成29年）2月から再開されています。



3 資源の状態

- ・資源量の指標となるCPUE（単位努力量あたり漁獲量）等の情報が不足していることから資源水準や動向は不明です。
- ・漁獲量の推移から、震災以前と比較して近年の資源は低位と考えられます。
- ・調査船による幼稚魚の分布密度調査の結果、2019年以降はほとんど稚魚が採集されていないことから、近年の発生は非常に少ないものと考えられます。



4 資源管理の取組・その他のトピック

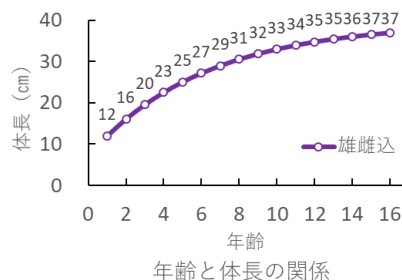
- ・新地町では古くから「釣師（つるし）がれい」と呼ばれ珍重されています。町の魚「かれい」として新地町のシンボルにもなっています。

ババガレイ（地方名：なめたがれい）

1 生態

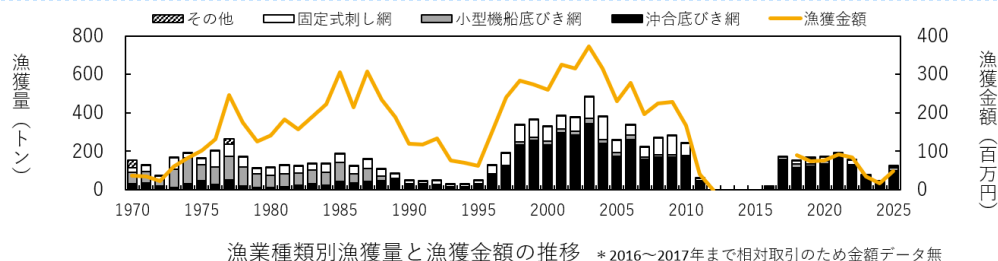
- ・福島県ではごく沿岸から水深300mに分布し、主漁場は200～300mです。産卵に伴い北海道から常磐海域にかけての広い海域を移動すると考えられます。
- ・メスは体長30cmで20～80%成熟し、産卵期は3～4月と考えられます。
- ・主に多毛類やイソギンチャク等のほか甲殻類を食べます。

* 東北太平洋沖ババガレイにおける年齢査定法の確立（谷瀬ほか2020）により右図を作成



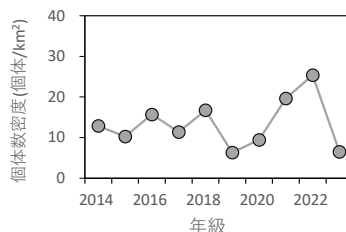
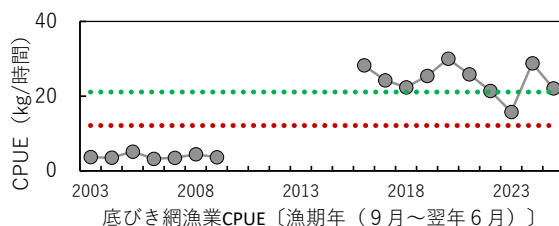
2 漁業に関する情報

- ・沖合底びき網及び小型機船底びき網や刺し網等で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は126トン、金額は48百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2016年（平成28年）11月から再開されています。



3 資源の状態

- ・原発事故の影響により操業が限定されている中、震災前と同程度の漁獲量で推移しています。
- ・震災後の底びき網漁業のCPUE（曳網1時間あたりの漁獲量）は、震災前と比較して非常に高い水準で推移しています。
- ・2025年（令和7年）漁期の資源水準は高位で、資源動向は横ばい傾向にあります。
- ・調査船調査の結果、2022年（令和4年）級の個体数密度は近年で最も高く、良好な加入水準と考えられました。



（参考）いわき丸トロール調査による年級別新規加入量の推移

4 資源管理の取組・その他のトピック

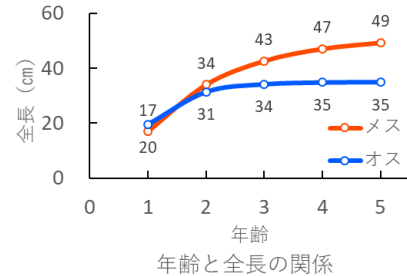
- ・産卵期に合わせて回遊する「渡り」と、磯根周辺に定着して生活する「地付き」という、生活様式の異なる2つのタイプが存在するといわれています。
- ・カレイの煮付けと言えば醤油味が一般的ですが、相馬市では本種を味噌で煮付けにします。味噌の甘さが繊細な白身に合ってとてもおいしいです。

ホシガレイ（地方名：はだがれい、がやま）

1 生態

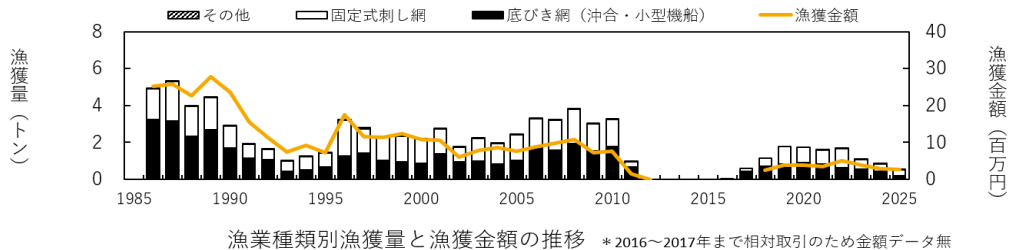
- ・本州中部以南、東シナ海、朝鮮半島沿岸などの水深200m以浅の砂泥域に分布し、幼稚魚は沿岸干潟域で成長します。
- ・成熟全長はオス28cm、メス40cm前後です。産卵期は12～2月で、盛期は1月です。
- ・幼稚魚はヨコエビ類、アミ類等、成魚はカニ類等の甲殻類を食べます。

* 福島県水試研究報告第14号（2007）により右図を作成



2 漁業に関する情報

- ・沖合底びき網及び小型機船底びき網や刺し網等で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は0.5トン、金額は2.7百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2016年（平成28年）10月から漁獲が再開されています。

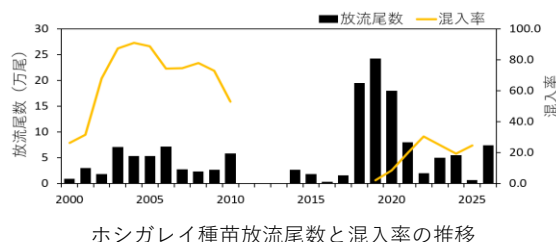


3 資源の状態

- ・資源量の指標となるCPUE（単位努力量あたり漁獲量）等の情報が不足していることから資源水準や動向は不明です。
- ・漁獲量の推移から、震災以前と比較して近年の資源は低位で減少傾向と考えられます。

4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・漁業者の自主的な取り決めにより、全長30cm未満の水揚げ、販売禁止に取り組んでいます。この取組は、2010年（平成22年）7月に相双地区で開始され、2011年（平成23年）1月から全県に拡大されました。
- ・福島県ではホシガレイの資源増大を目指して種苗放流に取り組んでいます。直近5か年では年間0.65万尾～7.4万尾を放流しました。混入率について震災前は、2004年（平成16年）の91%が最も高く、震災後は20万尾以上の大規模な種苗放流により2022年（令和4年）に30.3%まで上昇し、直近5か年の平均は23.7%となっています。

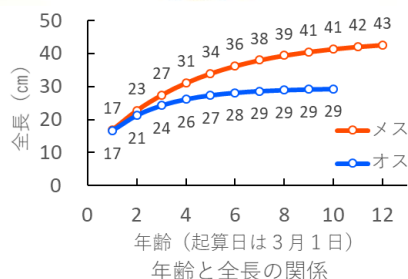


マガレイ（地方名：あかじがれい、あかじまこ）

1 生態

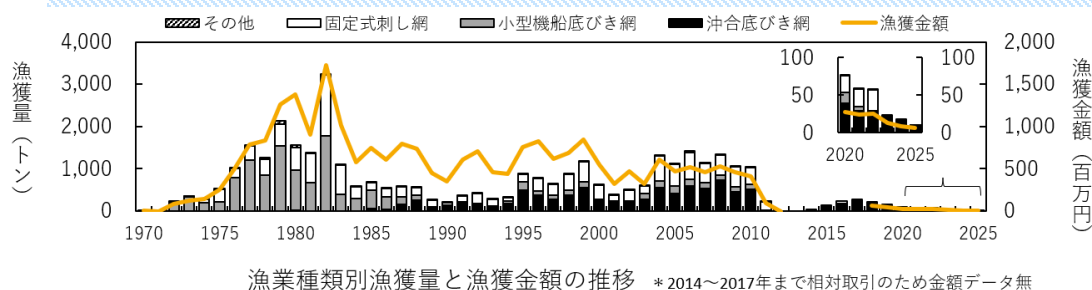
- ・瀬戸内海以北の太平洋から日本海沿岸の水深150m以浅に分布します。福島県では主に水深50～100mに分布します。季節的な移動がみられ、1～3月に水深40～60mの海域で多く漁獲されます。
- ・成熟年齢は、オス、メスとも満2歳で90%前後、満3歳ですべて成熟します。産卵期は3～5月です。
- ・主に多毛類や甲殻類を食べます。

* 仙台湾におけるマガレイの資源量推定（岡村ほか2020）により右図を作成



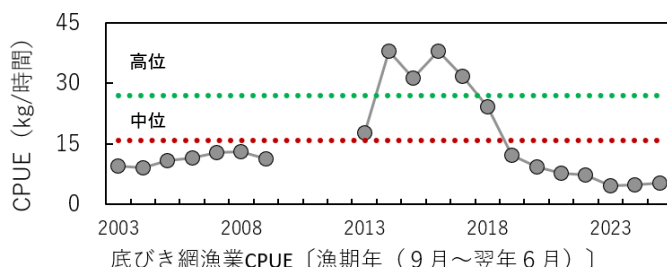
2 漁業に関する情報

- ・沖合底びき網及び小型機船底びき網や刺し網等で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は9.8トン、金額は6.0百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2014年（平成26年）9月から再開されています



3 資源の状態

- ・底びき網漁業のCPUE（曳網1時間あたりの漁獲量）は震災後に増加しましたが、2016年漁期から減少に転じ、2019年以降は震災前を下回る水準で推移しています。
- ・直近5カ年の底びき網漁業のCPUEから、2025年漁期の資源水準は低位で資源動向は減少と考えられます。



4 資源管理の取組・その他のトピック

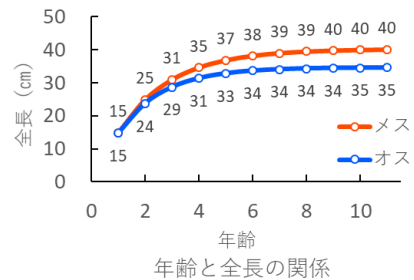
- ・相双地区では2007年（平成19年）から全長16cm未満の水揚げ、販売を禁止し、12月から翌年2月まで刺し網の目合を3寸4分以上に制限しています。

マコガレイ（地方名：ほんまこ、あおめ）

1 生態

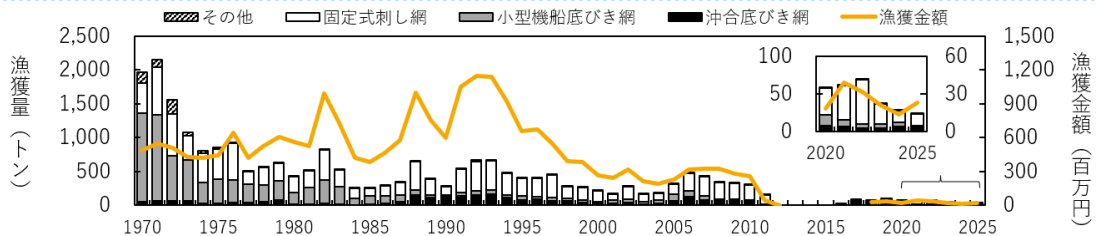
- ・北海道以南の日本各地の沿岸、朝鮮半島沿岸、黄海などに分布します。主に水深100m以浅に生息し、産卵期には水深50m以浅に移動します。
- ・成熟年齢は、オスの満2歳で90%、メスの満2歳で70%が成熟し、満3歳ではオスの全て、メスの80%が成熟します。産卵期は11～2月で、盛期は12～1月です。
- ・主に多毛類を食べます。

*「令和5（2023）年資源評価報告書」により右図を作成



2 漁業に関する情報

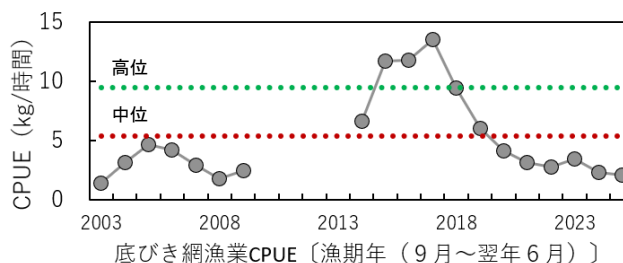
- ・沖合底びき網及び小型機船底びき網や刺し網等で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は22トン、金額は22百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2016年（平成28年）9月から再開されています。



漁業種類別漁獲量と漁獲金額の推移 * 2016～2017年まで相対取引のため金額データ無

3 資源の状態

- ・底びき網漁業のCPUE (曳網1時間あたりの漁獲量)は震災後に増加しましたが、2017年漁期以降は減少に転じ、2020年以降は震災前と同様の低い水準で推移しています。
- ・直近5カ年の底びき網漁業のCPUEから、2025年漁期の資源水準は低位で資源動向は減少と考えられます。



底びき網漁業CPUE〔漁期年（9月～翌年6月）〕

4 資源管理の取組・その他のトピック

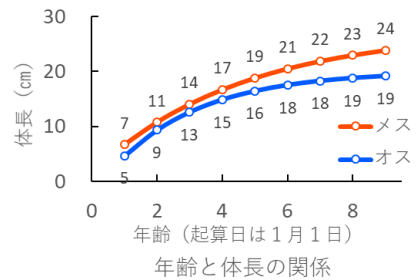
- ・年明け頃に漁獲される産卵後の親魚（相双地区では「がっば」と呼ばれる）は、非常に安価となることから、震災前には相双地区の刺し網漁業者の間で資源保護を目的として海に戻す取組みを検討していました。
- ・2011年1月には一部の地区で試験的に着手しましたが、震災により中断しているところです。

ミギガレイ（地方名：にくもち）

1 生態

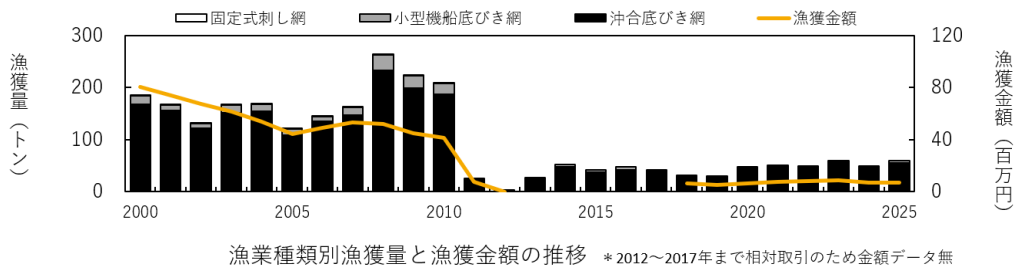
- ・北海道南部以南の日本各地に分布し、福島県沖では主に水深100～300mに生息します。産卵に伴い深浅移動します。
- ・成熟年齢について、満2歳から産卵活動に加わり、4歳以降ですべての個体が産卵活動に加わります。産卵期は10月～2月で、盛期は11～12月です。1産卵期に複数回に分けて産卵を行います。
- ・主に多毛類、甲殻類などを食べます。

* 福島県水試研究報告第8号（1999）により右図を作成



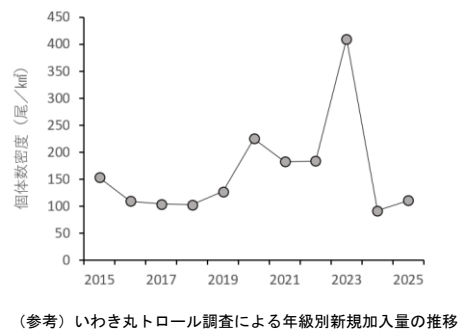
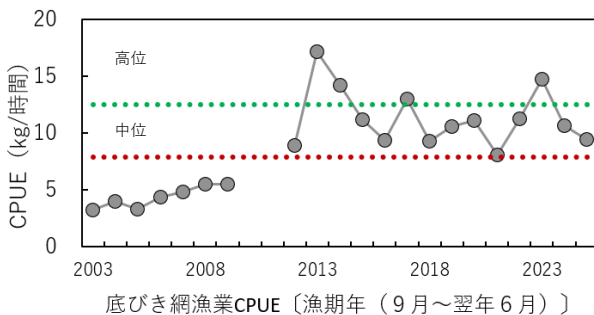
2 漁業に関する情報

- ・主に沖合底びき網で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は59トン、金額は6.7百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2012年（平成24年）11月から再開されています。



3 資源の状態

- ・資源の水準：中位、資源の動向：横ばい
- ・底びき網漁業のCPUE（曳網1時間あたりの漁獲量）は、2013年漁期をピークに減少し、中位横ばいで推移しています。
- ・調査船調査の結果では、2023年級の個体数密度が近年で最も高く、今後の漁獲への加入が期待されます。



4 資源管理の取組・その他のトピック

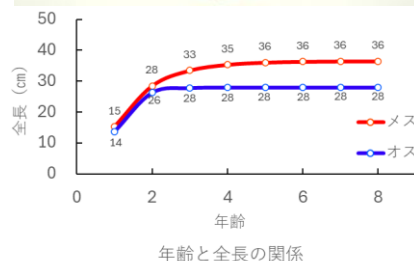
- ・現在、実施されている取り組みはありません。

ムシガレイ（地方名：みずがれい）

1 生態

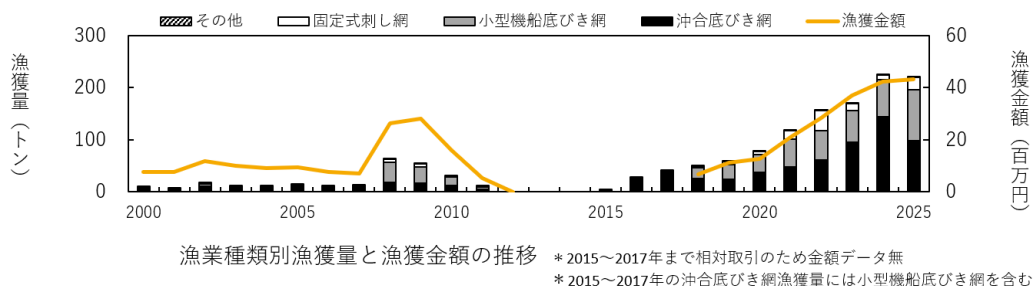
- ・日本海、東シナ海、黄海、渤海、噴火湾以南の太平洋沿岸の水深200m以浅に分布しています。
- ・成熟全長はオス19cm前後、メス24cm前後です。
- ・産卵期は3月頃で北に行くほど遅くなります。
- ・主に甲殻類や魚類、イカ類、多毛類を食べます。

* 福島県水試研報第15号（2010）により右図を作成



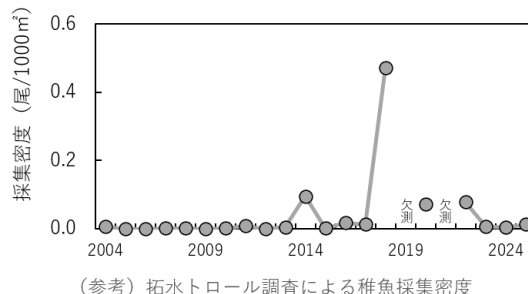
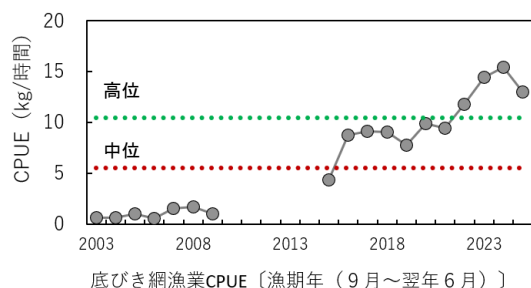
2 漁業に関する情報

- ・沖合底びき網及び小型機船底びき網や刺し網などで周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は219トン、金額は43百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2015年（平成27年）9月から再開されています。



3 資源の状態

- ・底びき網漁業のCPUE（曳網1時間あたりの漁獲量）は震災後に増加し、現在も高い水準で推移しています。
- ・この底びき網漁業のCPUEについて、近5か年の推移をみると、2025年漁期の資源水準は高位で資源動向は増加と考えられます。
- ・調査船による幼稚魚調査の結果、2018年に良好な発生が見られました。



4 資源管理の取組・その他のトピック

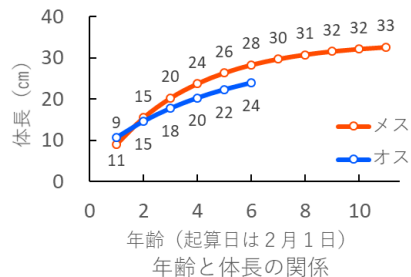
- ・現在実施されている取り組みはありません。

ヤナギムシガレイ

1 生態

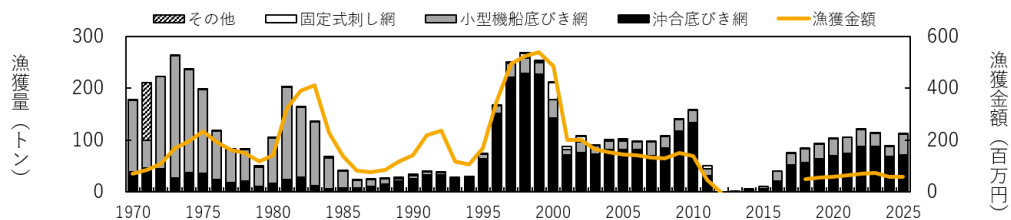
- ・北海道以南に分布し、福島県沖では主に水深100～150mに分布します。産卵に伴い浅海域に移動し、水深80～100mの海域で多く漁獲されます。
- ・産卵活動の主体はオスが満2～3歳、メスが3～5歳です。産卵期は1～6月で、盛期は1～3月です。
- ・主に多毛類、甲殻類などを食べます。

* 福島県水試研究報告第9号（2000）により右図を作成



2 漁業に関する情報

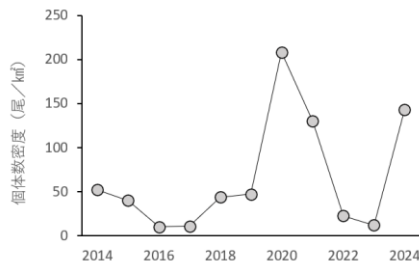
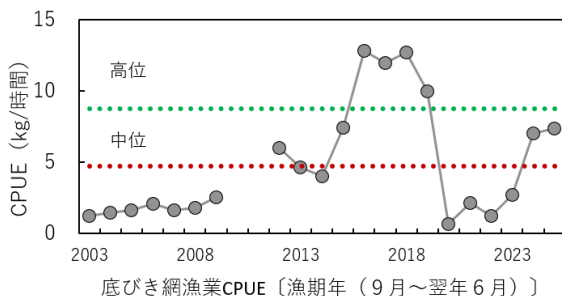
- ・主に沖合底びき網で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は110トン、金額は57百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2013年（平成25年）4月から再開されています。



漁業種類別漁獲量と漁獲金額の推移 * 2013～2017年まで相対取引のため金額データ無

3 資源の状態

- ・資源の水準：中位、資源の動向：増加
- ・底びき網漁業のCPUE（曳網1時間あたりの漁獲量）は、2018年漁期をピークに減少し震災前と同程度の低水準でしたが、2024年漁期以降の資源動向は増加傾向にあります。
- ・調査船調査の結果から、2020, 2021, 2024年級の個体数密度が高く、良好な加入があったと考えられます。



(参考) いわき丸トロール調査による年級別新規加入量の推移

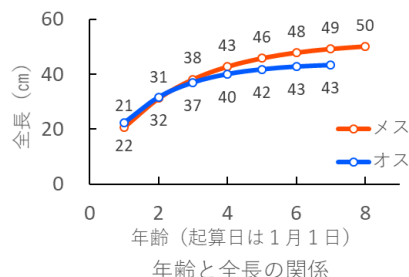
4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・国が作成する資源回復計画（～2011年度）に基づき、沖合底びき網漁業及び小型機船底びき網漁業において、保護区（4～6月）が設定され、2012年度以降は資源管理指針・資源管理計画体制の下で同様の管理策が行われています。
- ・現在、国ではヤナギムシガレイ太平洋北部系群について、資源管理方針を策定してTAC管理を検討しています。

アイナメ

1 生態

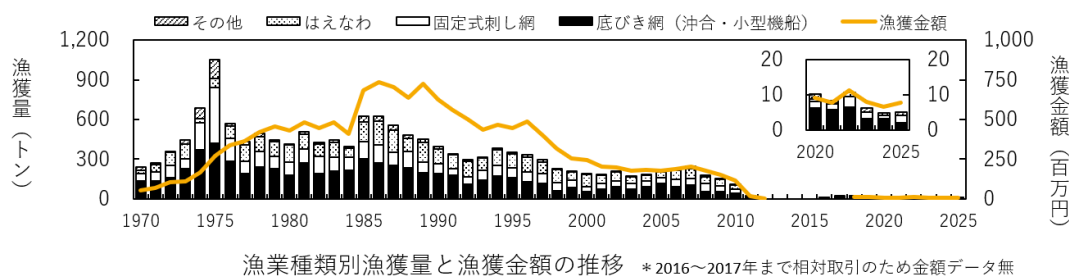
- ・日本各地の沿岸に生息し、朝鮮半島と黄海沿岸にも分布します。
- ・オスは満1歳、メスは満2歳で一部が成熟します。産卵期は12～1月で、産卵様式は多回産卵型です。繁殖期のオスには黄色の婚姻色が現れ、産卵後の卵塊を保護します。
- ・貝類、イカ類、甲殻類、魚類、多毛類などを食べます。



* 福島県水試研究報告第8号（1999）により右図を作成

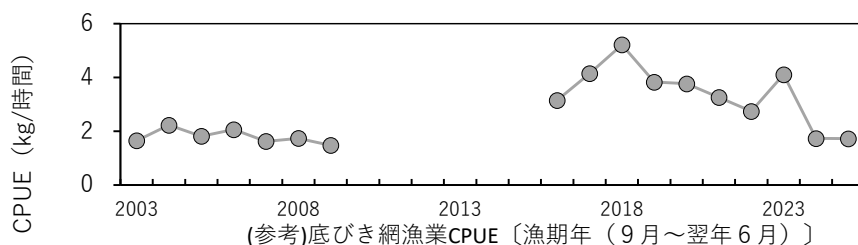
2 漁業に関する情報

- ・底びき網、刺し網で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は5.0トン、金額は7.9百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2016年（平成28年）9月から再開されています。



3 資源の状態

- ・近年の漁獲量は、震災前と比較して大きく減少していることから、資源は低位で推移しているものと考えられます。
- ・底びき網漁業のCPUE（曳網1時間あたりの漁獲量）は、震災後に高い水準となった期間がありましたが、2024年（令和6年）以降は震災以前と同水準となっています。



4 資源管理の取組・その他のトピック

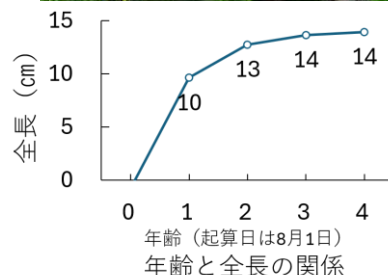
- ・1998年（平成10年）から全県で資源管理計画に基づいた漁獲サイズ規制（全長15cm未満の水揚げ禁止）を実施しています。
- ・震災以前にはイカナゴを餌に使用したはえなわ漁業（通称イケベ）で多く漁獲されていましたが、震災後は操業実態はありません。

アオメエソ（地方名：めひかり）

1 生態

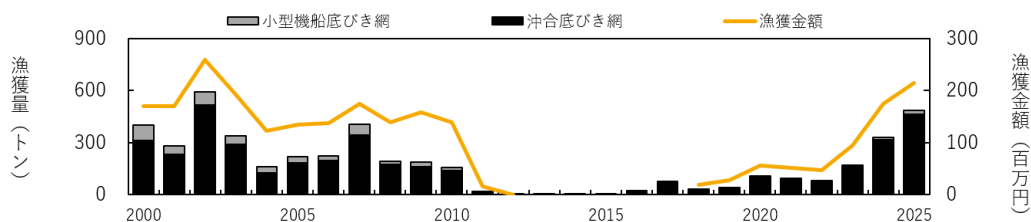
- ・青森県から九州の太平洋沿岸、新潟県以南の日本海沿岸に分布します。本県沿岸では、水深150～300mに分布し、0歳魚が1月頃に黒潮により来遊し、翌年の春頃から漁獲加入します。
- ・産卵期は2～7月、産卵場は日本列島の南西にあると推測されています。成熟年齢は不明です。
- ・主にオキアミ類を食べます。

*「東北海域におけるアオメエソの加入機構」（平川, 2008）の東北海域の成長式により右図を作成



2 漁業に関する情報

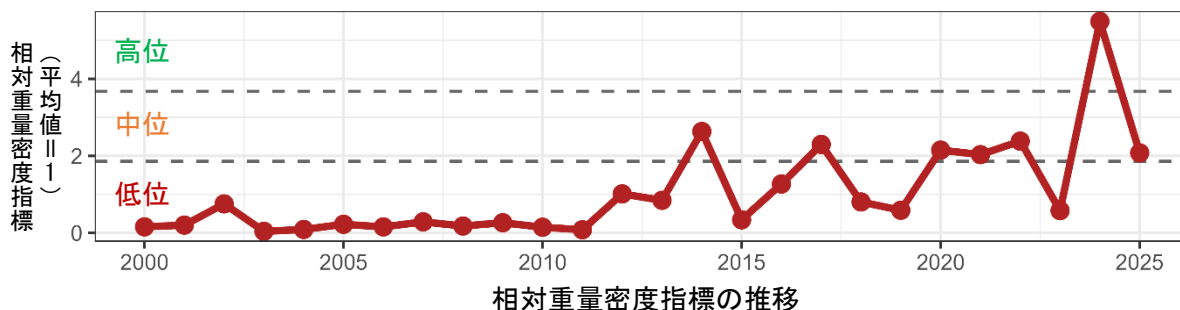
- ・底びき網で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は487トン、金額は214百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2012年（平成24年）11月から再開されています。



漁業種類別漁獲量と漁獲金額の推移 * 2012～2017年まで相対取引のため金額データ無

3 資源の状態

- ・資源の水準：中位、資源の動向：増加
- ・直近5か年における調査船調査の結果では重量密度が増加傾向にあり、特に2024年（令和6年）の資源水準が高くなっています。



4 資源管理の取組・その他のトピック

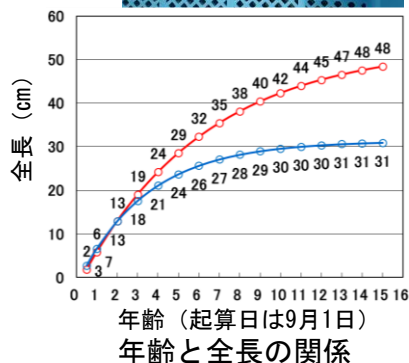
- ・現在、実施されている取組みはありません。
- ・いわき市で以前から特産品として親しまれており、2001年（平成13年）に市の魚に指定されています。
- ・令和3年度、いわき市がエントリーした「メヒカリの唐揚げ」が文化庁の100年フード宣言に認定されています。

アカムツ〔地方名：ノドグロ〕

1 生態

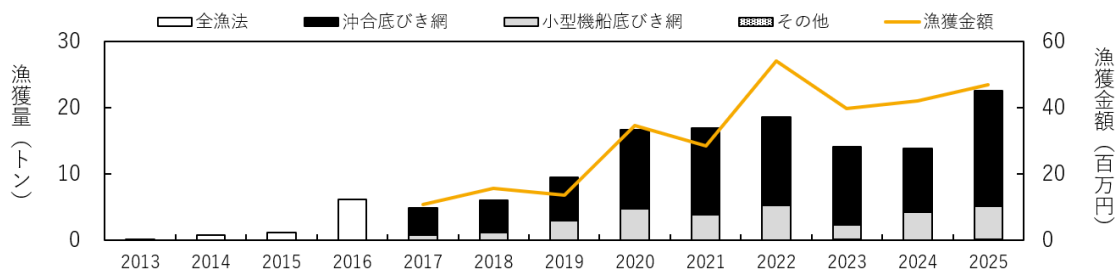
- ・北海道から九州南岸の太平洋沿岸、青森県から九州南岸の日本海沿岸に分布し、福島県沖では水深60～300mで漁獲されますが、その中心は80～160mとなっています。
- ・生殖腺が発達するのは雌雄とも6～10月で、雄では全長16cm以上、雌では19cm以上で成熟度合いの高い個体が確認されています。
- ・主に魚類や甲殻類、イカ類を食べます。

* 令和7年度福島県参考成果「アカムツの成長式、全長単価関係、年齢別漁獲尾数」により右図を作成



2 漁業に関する情報

- ・漁獲のほとんどが沖合底びき網及び小型機船底びき網によるものです。
- ・震災後、2016年から漁獲量が増加しており、2025年の漁獲量は22.6トン、金額は46百万円でした。



3 資源の状態

- ・資源の水準：中位、資源の動向：減少
- ・調査船調査の結果では、重量密度は2013年（平成25年）ごろから増加していますが、その後は増減をしながら推移しているため、今後の動向には注意が必要です。



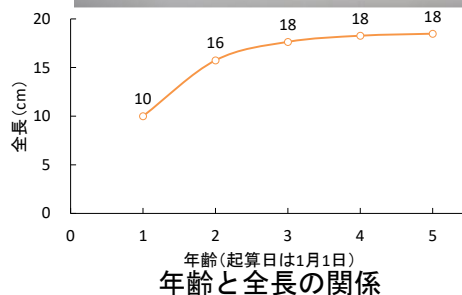
4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・2026年（令和8年）9月よりいわき地区底びき網部会において、小型魚の機動的保護区設定による自主的資源管理が始まっています。

イカナゴ〔地方名：こうなご（稚魚）、めろうど（成魚）〕

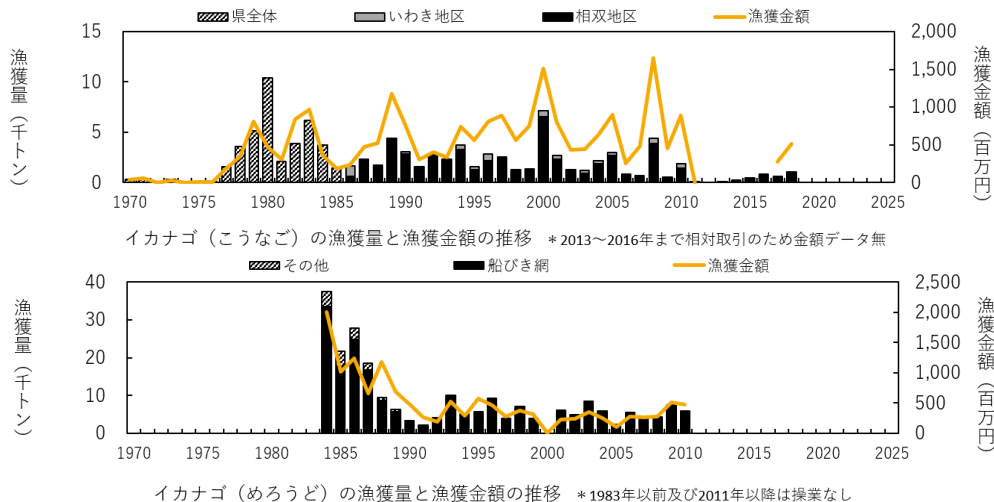
1 生態

- ・福島県で漁獲しているイカナゴは仙台湾系群に属しています。産卵期は12～1月で、主な産卵場は仙台湾周辺です。仔魚は1月下旬頃には福島県北部沿岸に運ばれ、2月下旬には南部沿岸まで分布が広がります。
- ・孵化直後の仔魚の体長は約5mmですが、3月には全長が概ね35mmを超えて漁獲加入します。全長40mmまでは約0.5mm/日で成長します。
- ・水温が15℃に達する夏季には、水深20～50mの中砂～砂礫帯の海底に潜砂し休眠します。
- ・主にカイアシ類等の浮遊性甲殻類を食べます。



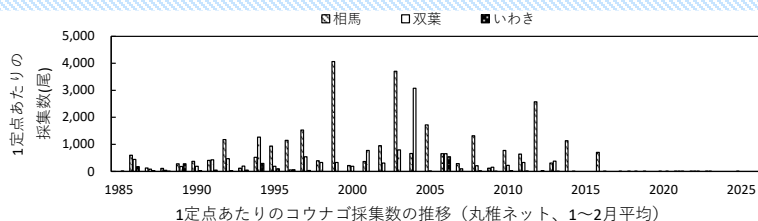
2 漁業に関する情報

- ・こうなご（稚魚）及びめろうど（成魚）を操業対象として、いずれも漁法は1そうびき（かけ回り）、または2そうびきによる船びき網で漁獲されていました。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2013年（平成25年）3月にこうなごを対象とした試験操業が再開されました。
- ・2019年（平成31年）漁期以降、漁場が形成されず、操業は行われていません。



3 資源の状態

- ・資源水準：低位 資源の動向：不明
- ・2019年（平成31年）以降、こうなご漁場が形成されないこと、県の調査で稚魚及び成魚の採集数が極めて少ない状況が継続していることから、資源水準は極めて低位であると考えられます。



4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・相双地区では、こうなごについて、低価格となるサイズを漁獲しないように、着業時期や漁期中の調整を行っていました。（漁期前調査に基づく初漁日の決定、加工不適サイズ（通称ジャンボこうなご）が多く混獲される場合の操業休止。）

イシカワシラウオ（地方名：しらうお）

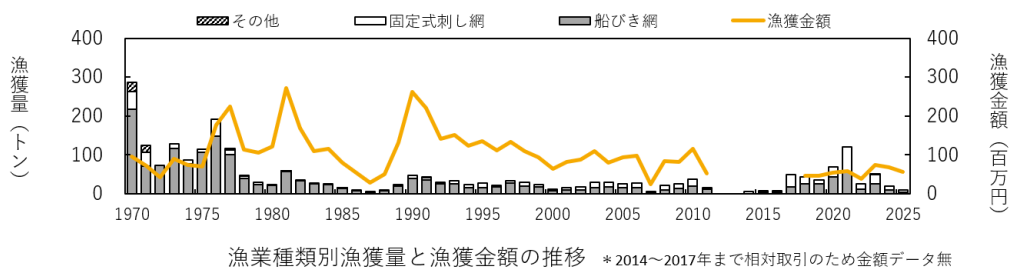
1 生態

- ・青森県から和歌山県までの太平洋沿岸に分布します。水深20m以浅の砂底に生息します。
- ・オス、メスとも1年で全長7cmほどに成長し、成熟、産卵後に死亡します。
- ・産卵期は2～6月で、盛期は5～6月です。水深5m前後の粗砂底に産卵します。



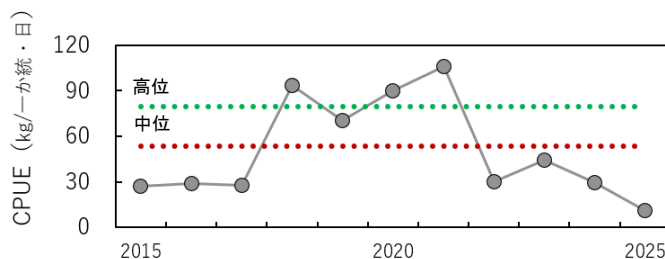
2 漁業に関する情報

- ・船びき網で12～翌3月、刺し網で2～4月に漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は10トン、金額は55百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2014年（平成26年）2月から再開されています。



3 資源の状態

- ・2017年以降、漁獲量は震災前の水準で推移していましたが、直近5か年は増減が大きいです。
- ・資源量指標値として、県内の漁獲量の大半を占める相双地区における船びき網漁業のCPUEから判断すると、資源水準は低位で資源動向は減少と考えられます。



4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・1992年（平成4年）から船びき網漁業及び刺し網漁業による県内漁業者協議会において漁業種類毎に操業期間の制限を設けています。
操業期間：船びき網漁業（12月～翌3月）、刺し網（2～4月）

シラス（カタクチイワシ仔稚魚）

1 生態

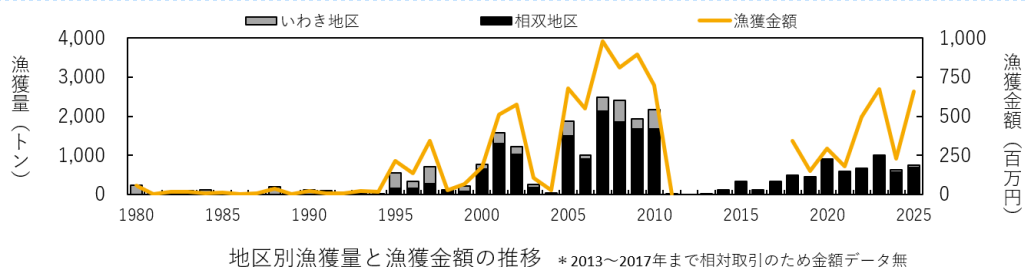
- ・福島県で漁獲される「シラス」は大部分がカタクチイワシの仔稚魚です。
- ・カタクチイワシの分布域は九州～北海道の太平洋沿岸域、黒潮・黒潮続流域、黒潮親潮移行域、親潮域、沖合は東経170度付近まで及びます。
- ・カタクチイワシ仔魚の成長速度は平均0.5mm/日と推定されており*、1ヶ月半ほどで約25mmに成長し、シラスとして漁獲加入します。
- ・1歳で成熟するとされており、産卵はほぼ周年行われます。
- ・主に動物プランクトンを食べます。

* 平成19年度事業概要報告書（福島県水産試験場）



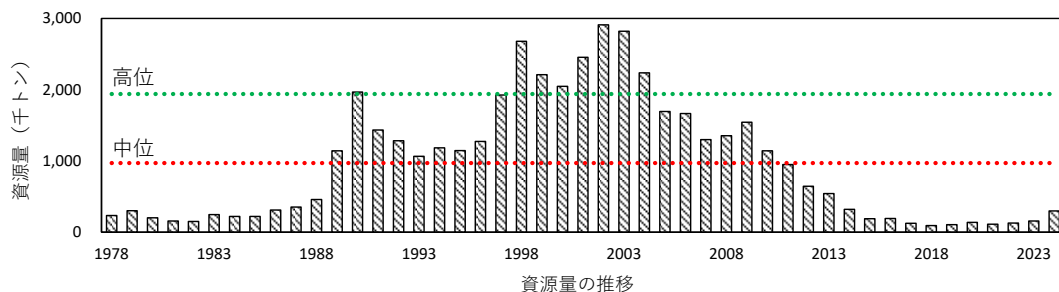
2 漁業に関する情報

- ・船びき網で漁獲されています。主な漁期は7～12月です。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2013年（平成25年）8月から再開されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は745トン、金額は657百万円でした。



3 資源の状態

- ・資源の水準：低位 資源の動向：増加
- ・国による令和7（2025）年度の資源評価によると2024年のカタクチイワシ太平洋系群の資源量は29.9万トンであり、親魚量の動向も直近5年間の推移から増加傾向にあります。



「令和7（2025）年度カタクチイワシ太平洋系群の資源評価」より上図を作成

4 資源管理の取組・その他のトピック

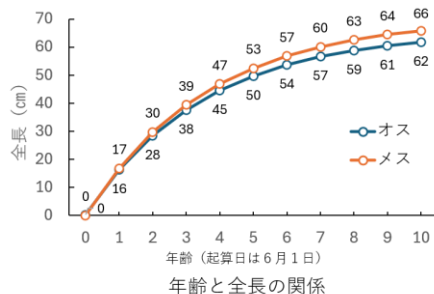
- ・カタクチイワシ太平洋系群は令和7年（2025年）1月1日からTAC管理（ステップ1）の対象種となりました。カエリ以上に成長したカタクチイワシ（体色が銀色のもの）のみが国によるTAC管理の対象となっています。

キアンコウ（地方名：あんこう）

1 生態

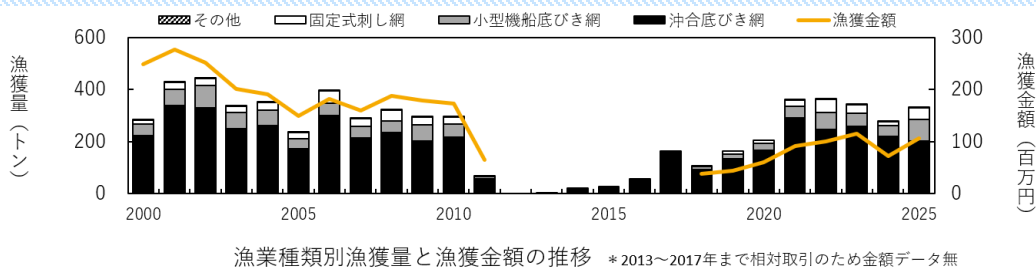
- ・北海道以南の日本沿岸に広く分布し、福島県沖では主に水深50～200mに生息しています。産卵期に水深30m付近まで接岸します。
- ・成熟全長は、雄が約43cm、雌が約68cmで、産卵期は4月から遅くとも8月と推定されています。
- ・主に魚類やイカ、タコ類を食べます。

*「青森県周辺海域におけるキアンコウの生態および資源に関する研究」（竹谷, 2017）の太平洋海域の成長式により右図を作成



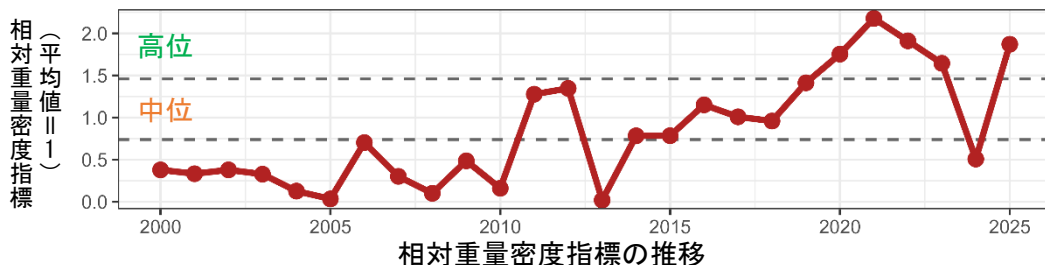
2 漁業に関する情報

- ・底びき網、刺し網で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は329トン、金額は106百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2013年（平成25年）9月から再開されています。



3 資源の状態

- ・資源の水準：高位、資源の動向：減少
- ・調査船調査の結果では、震災後、キアンコウの資源は増加しましたが、2024年（令和6年）に減少がみられ、全体の動向は減少となっています。直近の2025年（令和7年）は高い資源水準となり、加えて2024年から継続して小型（全長15cm程度）の個体がみられているため、今後の漁獲への加入が期待されます。



4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・国が作成する資源回復計画（～2011年度）に基づき、沖合底びき網漁業及び小型機船底びき網漁業において、保護区（4～6月）が設定され、2012年度以降は資源管理指針・資源管理計画体制の下で同様の管理策が行われています。
- ・令和3年度にいわき市がエントリーした「あんこうのどぶ汁」が文化庁の100年フード宣言に認定されています。

サケ（シロザケ）

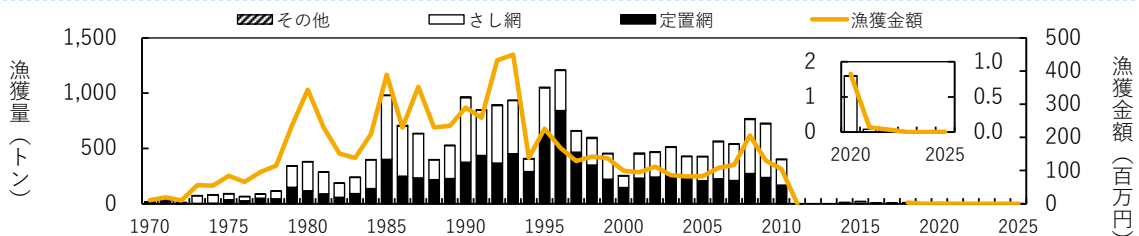
1 生態

- ・主に茨城県以北の太平洋側、石川県以北の日本海側に分布します。河川で生まれた稚魚は3～5月に降海し、北太平洋海域（オホーツク海、ベーリング海、アラスカ湾）まで索餌回遊します。成熟すると日本沿岸まで来遊します。
- ・2歳で約50cm、4～6歳で最大80cmに成長します。
- ・成熟は2～6歳で、主群は4歳です。9～12月にかけて沿岸に来遊し、生まれた河川に遡上して産卵します。
- ・幼魚期は主に動物プランクトン、成魚はオキアミ、魚類やイカ類を食べます。



2 漁業に関する情報

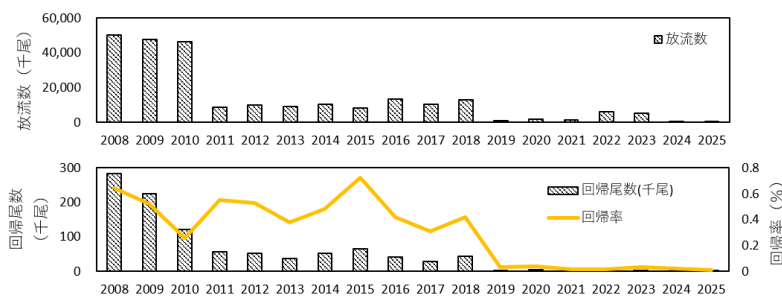
- ・刺し網や定置網で漁獲されています。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2014年（平成26年）9月から再開されています。
- ・2025年（令和7年）の海面での漁獲量は8.6kgでした。



漁業種類別漁獲量と漁獲金額の推移 * 2014～2017年まで相対取引のため金額データ無

3 資源の状態

- ・資源の水準：低位 資源の動向：横ばい
- ・国による「令和7年度国際漁業資源の現況」によればサケ（シロザケ）日本系の資源水準は低位、動向は横ばいです。
- ・本県においては2019年（令和元年）以降、海面漁獲量、河川捕獲数ともに極端に減少していることから、本県におけるサケの資源水準は極めて低位であると考えられます。また、回帰率も2019年（令和元年）以降急激に低下し、2025年（令和7年）の回帰率はわずか0.008%でした。



参考：福島県におけるサケの放流数（上図）、回帰尾数、回帰率（下図）

4 資源管理の取組・その他のトピック

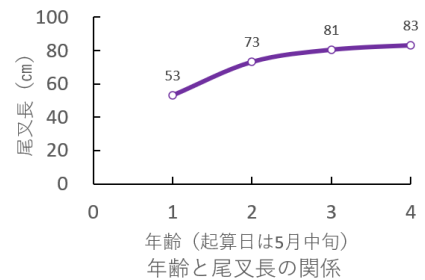
- ・種苗放流に取り組んでいますが、親魚の回帰が非常に悪く、令和7年度のサケ稚魚放流尾数は5.8万尾にとどまっています（平成21年度比0.1%）。
- ・産卵親魚保護のため、福島県漁業調整規則等により河口前面海域での採捕が制限されています。

サワラ〔地方名：さごし（小型）〕

1 生態

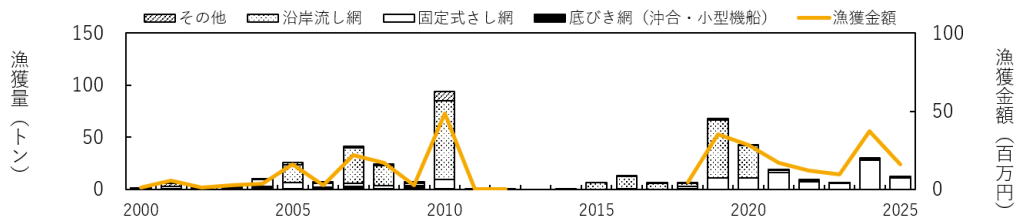
- ・東シナ海から黄海、北海道以南の日本海、瀬戸内海を中心とした太平洋沿岸域に分布します。
- ・雄は1歳、雌は2歳で大半が成熟します。
- ・産卵場は東シナ海、瀬戸内海にあり、産卵期は東シナ海では3～6月、瀬戸内海では5～6月です。
- ・本県沖で漁獲されるサワラは、日本海側から来遊すると考えられます。
- ・生活史を通じて魚食性が非常に強く、イワシ等を捕食します。

* 福島県水産試験場研究報告第7号（平川1991）により右図を作成



2 漁業に関する情報

- ・相双地区を中心に、流し網や固定式さし網等で漁獲されます。年ごとの来遊状況によりますが、盛漁期は8～12月です。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は12トン、金額は16百万円でした。
- ・過去10年の漁獲量は6.5～68トンの範囲にありますが、1985年には430トン、361百万円の漁獲があったと報告されています。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛のため沿岸漁業による水揚げはありませんでしたが、2014年（平成26年）8月から再開されています。



漁業種類別漁獲量と漁獲金額の推移 * 2013～2017年まで相対取引のため金額データ無

3 資源の状態

- ・資源量の指標となるCPUE（単位努力量あたり漁獲量）等の情報が不足していることから、資源水準や動向は不明です。
- ・漁獲量の増減は本県沿岸域への来遊状況によると考えられ、年変動が大きいことが特徴です。

4 資源管理の取組・その他のトピック

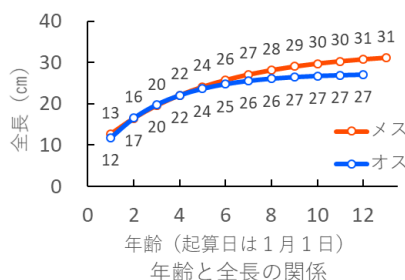
- ・漁獲の主体は、8～12月に索餌のため来遊する1歳魚であると考えられます。一方、2026年（令和8年）の6～7月には、全長80cmを超え、発達した生殖腺を持つサワラが多く水揚げされました。このことから、海況の変化が、来遊状況に影響した可能性があります。

シロメバル（地方名：めばる）

1 生態

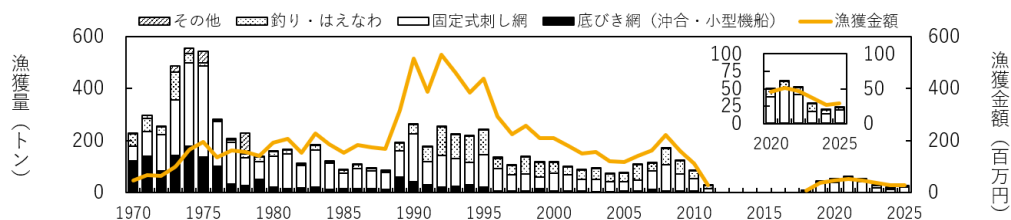
- ・青森県から九州北西岸の日本海・東シナ海、東北太平洋沿岸、相模湾から三重県の太平洋沿岸、瀬戸内海、有明海の岩礁域に分布しています。
- ・オスは2歳、メスは3歳で全ての個体が成熟します。卵胎生で12～2月に仔魚を産みます。仔魚は2か月ほど浮遊生活をした後、沿岸の藻場などを主な生息場とします。
- ・主に甲殻類や魚類を食べます。

* 福島県水試研究報告第13号（2006）により右図を作成



2 漁業に関する情報

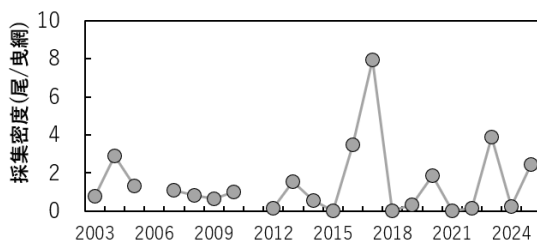
- ・主に刺し網や釣り等で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は23トン、金額は28百万円でした。
- ・2011年（平成23年）3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2018年（平成30年）6月から再開されています。



漁業種類別漁獲量と漁獲金額の推移 * 2013～2017年まで相対取引のため金額データ無

3 資源の状態

- ・資源量の指標となるCPUE（単位努力量あたり漁獲量）等の情報が不足していることから資源水準や動向は不明です。
- ・漁獲量の推移から、震災以前と比較して近年の資源は低位と考えられます。
- ・松川浦での稚魚調査によると、良好な漁獲加入がみられた2017年級のほか、2023年級、2025年級で比較的高い採集密度であり、今後の漁獲加入が期待されます。



(参考) 松川浦ビームトロール調査における稚魚の採集密度の推移

4 資源管理の取組・その他のトピック

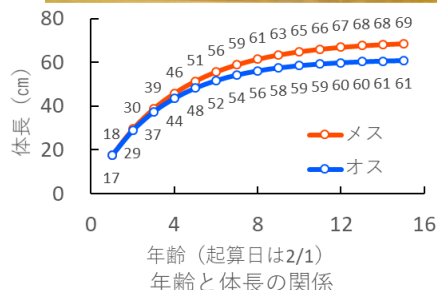
- ・甲斐・中坊（2008）により、メバルとされていた種がアカメバル・クロメバル・シロメバルの3種に分類されました。胸鰭の軟条数などで判別できます。
- ・本県の水揚げのほとんどはシロメバルですが、まれにアカメバルも見られます。

スズキ〔地方名：せいご、ふっこ（小型）〕

1 生態

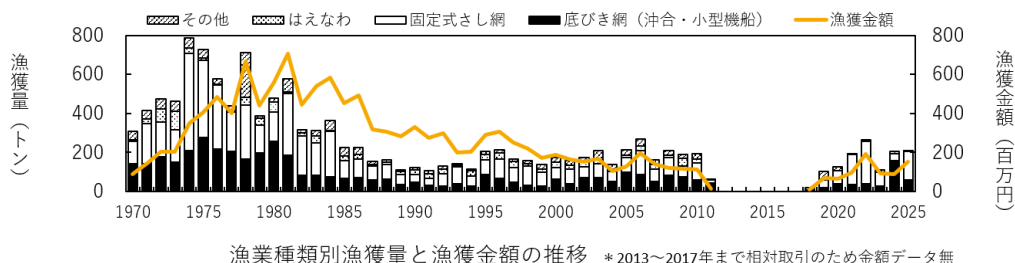
- ・北海道南部以南の沿岸に広く分布し、若齢魚は汽水～淡水域にも移動する海水性両側回遊魚です。
- ・オスは3歳以上、メスは4歳以上でほぼ全ての個体が成熟します。産卵期は主に12～1月です。
- ・未成魚はアミ類等の甲殻類、魚類仔稚魚等、成魚はサバ類やイワシ類等の魚類やエビ類を食べます。

* Age determination and growth pattern of temperate seabass *Lateolabrax japonicus* in Tango Bay and Sendai Bay (Wei J et al. 2019) により右図を作成



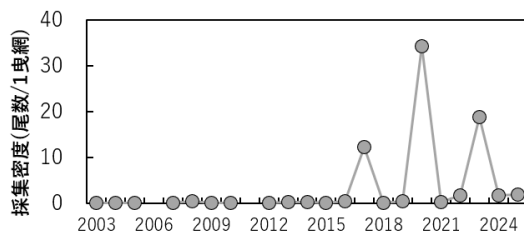
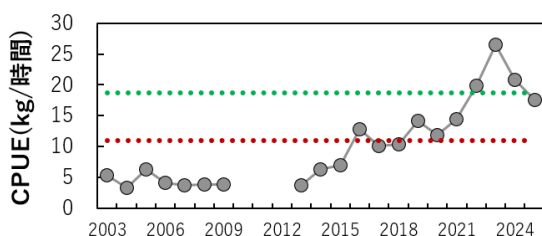
2 漁業に関する情報

- ・底びき網、刺し網で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は209トン、金額は151百万円でした。
- ・2011年（平成23年）3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2018年（平成30年）6月から再開されています。



3 資源の状態

- ・底びき網漁業のCPUEを指標値として判断すると、2025年（令和7年）は17.6kg/時間で資源水準の高中位境界（18.7kg/時間）を下回り、資源水準は中位、2021-2025年（令和3-7年）漁期における資源動向は横ばいと考えられます。
- ・松川浦での稚魚調査から、2023年級が2020年級に次ぐ高水準とみられ、今後の漁獲加入が期待されます。



4 資源管理の取組・その他のトピック

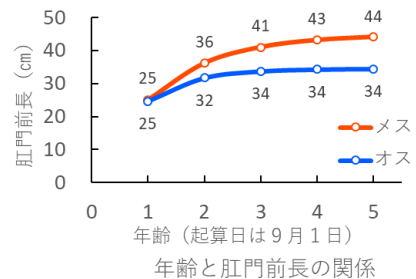
- ・冬季に産卵する親魚への漁獲圧を減らすことで、産卵量の増加につながるものと考えられます。

タチウオ

1 生態

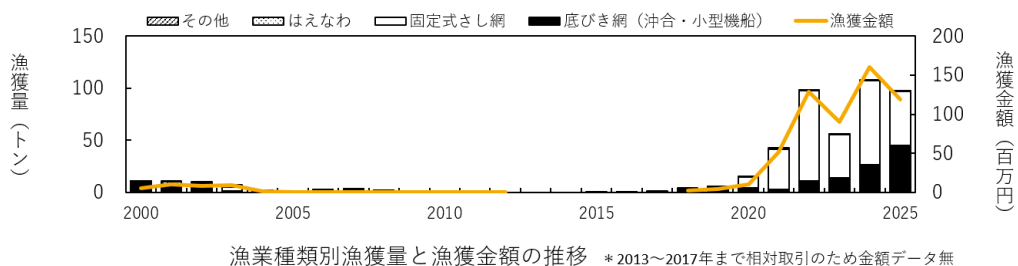
- ・北海道以南の本州沿岸から東シナ海、朝鮮半島西岸、黄海・渤海にかけて広く分布します。
- ・2歳以上でほぼ全ての個体が成熟し、産卵に与します。
- ・産卵期は7～10月で、9月が盛期と考えられます。
- ・生殖腺の発達状況や卵・稚魚の採集状況から、本県沖でも産卵していると考えられます。
- ・成魚は魚食性が強く、イワシ類やサバ類などを捕食します。

* 仙台湾におけるタチウオの漁獲動向と生物特性（増田ほか2022）により右図を作成



2 漁業に関する情報

- ・主に刺し網、底びき網で周年漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は97トン、金額は118百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2015年（平成27年）10月から再開されています。



3 資源の状態

- ・資源量の指標となるCPUE（単位努力量あたり漁獲量）等の情報が不足していることから、資源水準や動向は不明です。
- ・漁獲量の推移から、震災以前と比較して近年の資源は高位で増加傾向と考えられます。

4 資源管理の取組・その他のトピック

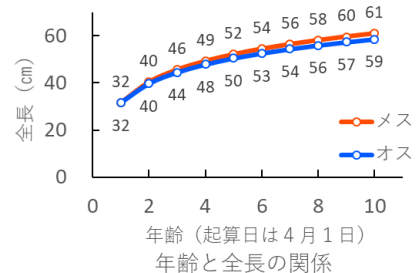
- ・震災前の漁獲量はわずかでしたが、近年、海況の変化とともに漁獲量が増加しています。福島県沖でも産卵していることが確認されていることから、産卵期の保護など、資源を維持するための取り組みが重要と考えられます。
- ・銀色に輝く姿は、まさしく刀のようです。タチウオは体の表面に傷がないきれいな個体ほど高値で取引されます。そのため、固定式さし網漁業では、商品価値を保つため、魚体に傷がつかないように細心の注意を払って取り扱います。

トラフグ

1 生態

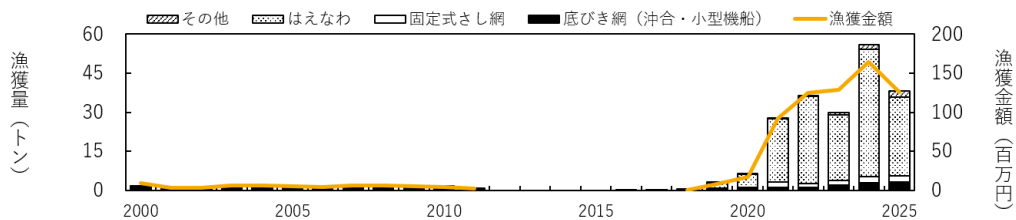
- ・日本海、東シナ海、黄海、瀬戸内海及び太平洋沿岸の広範囲に分布します。
- ・オスは満2歳、メスは満3歳で成熟します。本種の産卵場は全国に散在しており、日本海側では秋田県以南、太平洋側では東京湾以南に確認されています。産卵期は地域により異なりますが、主に3～5月です。
- ・成魚は魚類やエビ類等の甲殻類を食べます。

＊「令和5（2023）年度トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群の資源評価」により右図を作成



2 漁業に関する情報

- ・主にはえなわで漁獲され、盛漁期は10月～翌年1月です。
- ・震災前の漁獲量は2トン程度でしたが、2019年（令和元年）以降、はえなわの着業とともに漁獲量が急増しました。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は38トン、金額は126百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2016年（平成28年）1月から再開されています。



漁業種類別漁獲量と漁獲金額の推移 ＊2013～2017年まで相対取引のため金額データ無

3 資源の状態

- ・資源量の指標となるCPUE（単位努力量あたり漁獲量）等の情報が不足していることから、資源水準や動向は不明です。
- ・漁獲量の推移から、近年の資源は高位で増加傾向にあると考えられます。

4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・相双地区のはえなわ漁業者による自主的な取り決めとして、全長35cm以上の個体を水揚げ対象とし、水揚げ尾数に上限を設けるとともに、操業期間を需要が高まる10月～翌年2月に設定しています。
- ・相双地区では、はえなわ漁業で水揚げされた全長35cm以上の活魚のトラフグを「福とら」と名付けて特産品化を進めています。

マアナゴ（地方名：はも）

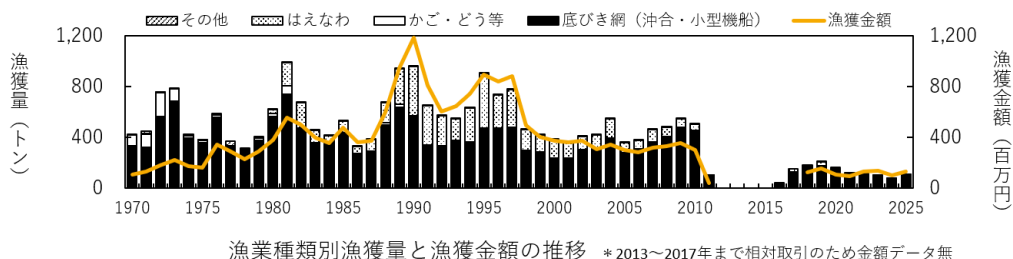
1 生態

- ・北海道以南の沿岸に広く分布します。葉形仔魚は黒潮によって運ばれて2月頃に本県海域に來遊します。
- ・本県では成熟個体は見つかっていません。産卵場は沖ノ鳥島南方の九州-パラオ海嶺上の海域とされており、12月頃に産卵します。
- ・小型から中型魚は、エビ類や魚類等様々な生物を捕食し、全長50cm以上の大型魚では魚類や軟体動物の大型種の捕食が多くなります。



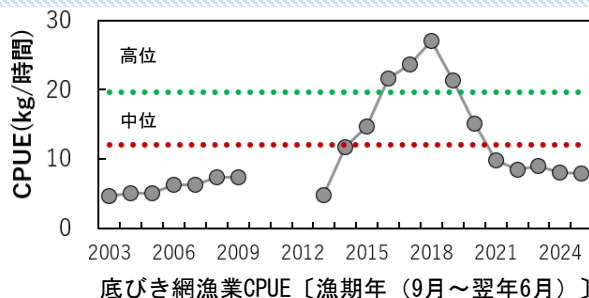
2 漁業に関する情報

- ・主に底びき網、はえなわで漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は105トン、金額は128百万円でした。
- ・2011年（平成23年）3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2016年（平成28年）9月から再開されています。
- ・震災前には、いわき地区で船びき網による葉形仔魚（水揚げ時の地方名：ノレソレ）を対象とした操業が行われていました。



3 資源の状態

- ・底びき網漁業のCPUEを指標値として判断すると、2025年（令和7年）は7.9kg/時間で資源水準の低中位境界線（12.1kg/時間）を下回り、資源水準は低位、2021-2025年（令和3-7年）漁期における動向は減少と考えられます。
- ・震災以降は増加傾向を示しましたが、2019年（令和元年）以降は減少に転じています。



4 資源管理の取組・その他のトピック

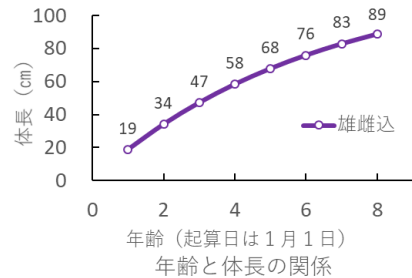
- ・2007年（平成19年）2月策定の「福島県マアナゴ資源回復計画」により、全長30cm未満のマアナゴの漁獲禁止が開始され、現在も自主的な体長制限が取り組まれています。
- ・震災前には葉形仔魚についても地区ごとに、漁獲規制（相双地区：禁漁、いわき地区：2～5月、20kg/隻・日、休漁日設定）を定めていました。

マダラ〔地方名：みずたら、ぽんたら（小型）〕

1 生態

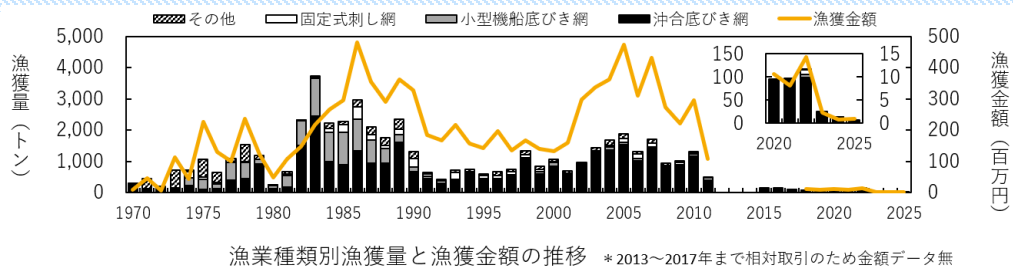
- ・日本海から東シナ海北部、茨城県以北の太平洋岸、オホーツク海に分布します。主に水深100～550mに生息し、季節的に深淺移動します。
- ・成熟年齢は3～4歳で成熟後は毎年産卵します。東北太平洋岸の産卵期は12～3月で仙台湾や三陸沿岸に産卵場が形成されます。
- ・成魚は主に魚類及びイカ・タコ類を食べます。

＊「令和5（2023）年度マダラ本州太平洋北部系群の資源評価」により右図を作成



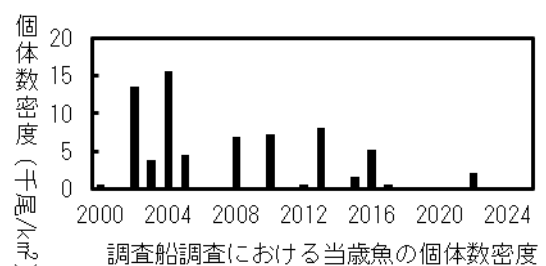
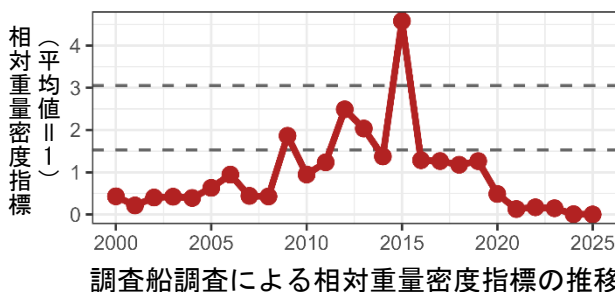
2 漁業に関する情報

- ・主に底びき網で漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は5.6トン、金額は1.0百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2015年（平成27年）1月から再開されています。



3 資源の状態

- ・資源の水準：低位、資源の動向：横ばい
- ・調査船調査の結果では、2015年（平成27年）に高い資源水準を示しましたが、その後は減少し、近年の資源水準は低位、動向は横ばいの状態が続いています。
- ・同様に新規加入量調査では、2017年以降、少ない状態が続いています。



4 資源管理の取組・その他のトピック

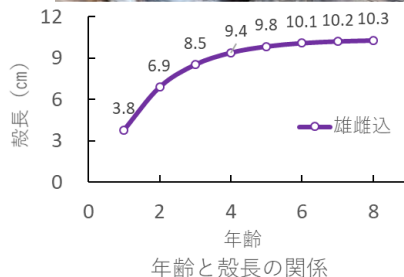
- ・マダラ本州太平洋北部系群は、令和6年7月よりステップアップ管理対象資源として漁獲可能量（TAC）管理が行われており、令和8管理年度現在、ステップ2（試行段階）の位置づけとなっています。

ウバガイ（地方名：ほっきがい）

1 生態

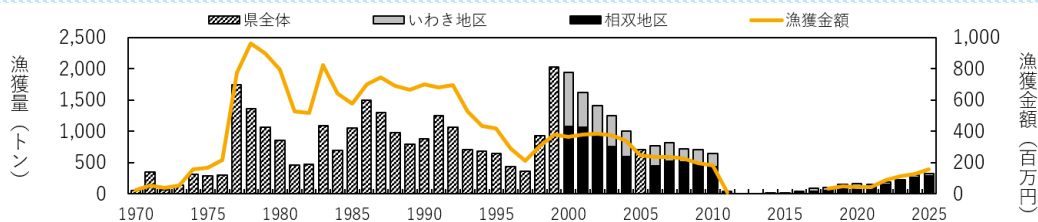
- ・鹿島灘以北、日本海北部から沿海州、オホーツク海の水深15m以浅の砂底域に分布します。
- ・成熟開始年齢は3～4歳です。福島県沿岸における産卵期は4～5月で北に行くほど遅くなります。
- ・底生微細藻類及びデトリタスを食べます。

* 仙台湾におけるウバガイ貝桁網漁業とその生物学的管理（佐々木 1986）により右図を作成



2 漁業に関する情報

- ・貝けた網で6月～翌1月の期間に漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は327トン、金額は156百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2014年（平成26年）6月から再開されています。



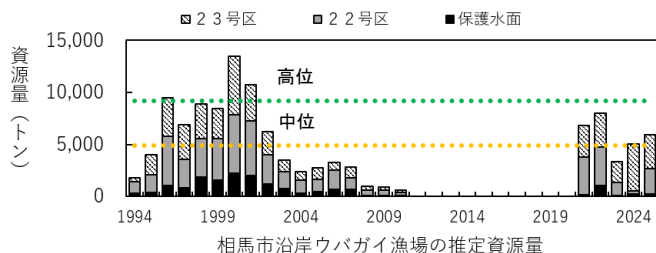
漁獲量と漁獲金額の推移 * 2014～2017年まで相対取引のため金額データ無

3 資源の状態

- ・相馬市沿岸のウバガイ漁場の推定資源量を指標値とすると、2025年は5,942トンで資源水準の中低位境界（4,879トン）を上回り資源水準は中位、近5か年の推移から資源動向は減少と判断します。

- ・ウバガイは稚貝発生年の変動が大きく、本県においては稚貝発生年の著しく大きい年級に後年の水揚げが支えられる事例がしばしば見られます。

近年の稚貝調査及び相双地区の漁獲物の殻長組成と年齢査定結果から、現在は2014年級が漁獲の主体と考えられます。



4 資源管理の取組・その他のトピック

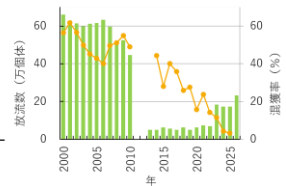
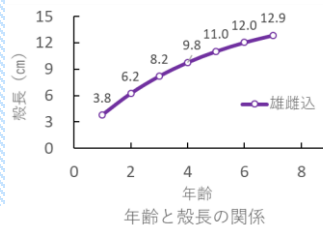
- ・県漁業調整規則による殻長、漁期の制限の他、自主規制として操業船の一日の曳網回数や水揚げ数量制限が行われています。また、一部の地区では、漁船の共同利用による操業管理が行われています。

エゾアワビ（地方名：あわび）

1 生態

- ・茨城県以北の太平洋岸海域と新潟県以北の日本海側海域、水深10m以浅の岩礁域に分布します。
- ・3～4歳で成熟し、産卵期は8～11月です。漁獲できる殻長になるまで4～5年を要します。
- ・成貝は主にワカメ、アラメ、マコンブ等のコンブ目大型褐藻類を食べます。

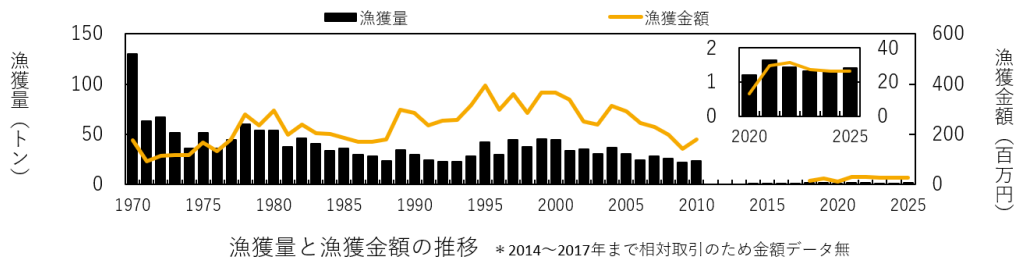
＊福島県水試研究報告第18号(2018)により右図を作成



＊混獲率はいわき市内6地区の単純平均

2 漁業に関する情報

- ・素潜りや潜水器を用いて漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は1.4トン、金額は26百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2014年（平成26年）5月から再開されています。



漁獲量と漁獲金額の推移 ＊2014～2017年まで相対取引のため金額データ無

3 資源の状態

- ・資源の水準：不明、資源の動向：横ばい
- ・震災前から各地区で漁獲個数を制限しているため、漁獲量の推移のみから資源水準と動向は推定できません。
- ・震災以降、各地区で漁獲物の大型化が確認されています。
- ・2013年（平成26年）より人工種苗の放流を再開しましたが、放流数は震災前の半数程度（約23万個）にとどまっており、人工種苗の混獲率は震災前より大幅に低下しています。

4 資源管理の取組・その他のトピック

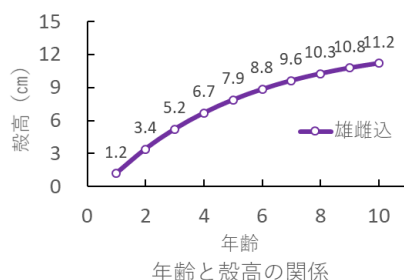
- ・多くの地先で1人1日あたりの漁獲個数を自主規制しています。
- ・漁獲圧の低下により資源が大型化していることから、余命が短く単価の高い大型個体から漁獲することで、効率的に資源を利用しています。
- ・福島県漁業調整規則では禁漁期（毎年10月1日から翌年4月30日）と漁獲サイズの制限（殻長9.5cm以下）が規定されています。

シライトマキバイ（地方名：まきつぶ、つぶ）

1 生態

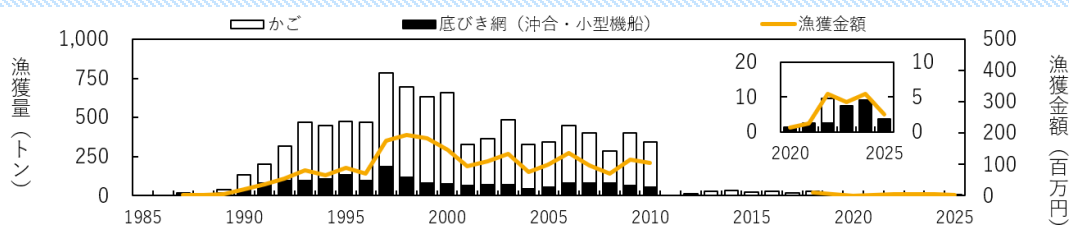
- ・ 鹿島灘から北海道までの水深50m～500mに分布し、福島県では主に水深200m～300mに生息しています。直達発生で、生活史を通じて浮遊期間を持たず底生生活を送ることから移動や分散は限定的です。
- ・ 雄で殻高が約8.5cm、雌で約10.5cmになると、半数の個体が成熟すると考えられます。産卵期は不明ですが、一年中産卵している可能性があります。
- ・ 肉食性で海底に沈んだ魚類の肉等を食べていると考えられます。

＊「令和6（2024）年度 資源評価報告書」により右図を作成



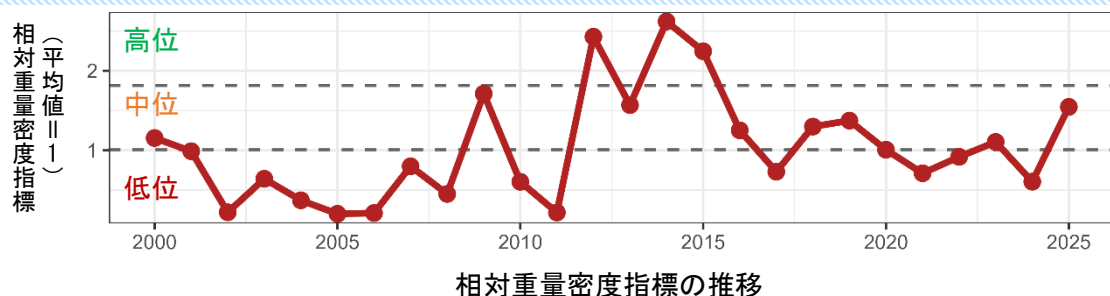
2 漁業に関する情報

- ・ 底びき網や沖合たこかごで漁獲されています。
- ・ 2025年（令和7年）の漁獲量は3.6トン、金額は2.5百万円でした。
- ・ 2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2012年（平成24年）7月から再開されています。



3 資源の状態

- ・ 資源の水準：中位、資源の動向：増加
- ・ 調査船調査の結果では、震災前と比較して、重量密度の増加が確認されています。



4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・ 沖合たこかご漁業は知事許可漁業の許可等に関する取扱方針において、漁期、操業区域、使用かご数（300個まで）等の制限が定められています。
- ・ 2024年、2025年において、沖合たこかごの操業実績はありませんでした。

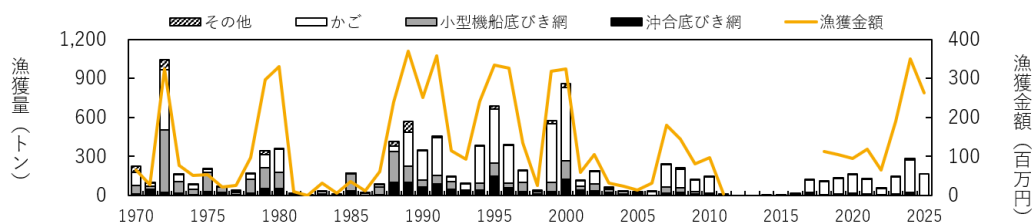
1 生態

- ・青森県以南の沿岸に広く分布します。本県沿岸では、茨城県沿岸で発生した個体が北上流で輸送されて6～8月に出現します。また、仙台湾周辺で生育した個体が、10～1月頃に南下して来遊します。
- ・寿命は1～2年、メスの産卵は一生に1回で、卵がふ化した後に死亡します。
- ・肉食性で、浮遊期の稚仔はアミ類などの浮遊性甲殻類を食べますが、底生生活移行後はエビ、カニなどの甲殻類や貝類を好む他、魚類も食べます。



2 漁業に関する情報

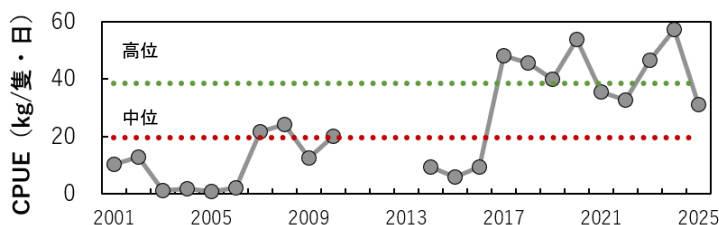
- ・主にかごで漁獲されています。
- ・かご漁業の主漁期は11～翌1月ですが、近年は夏頃まで続いています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は185トン、金額は263百万円でした。
- ・2011年（平成23年）3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2014年（平成26年）10月から漁業が再開されています。



漁業種類別漁獲量と漁獲金額の推移 *2014～2017年まで相対取引のため金額データ無

3 資源の状態

- ・相双地区のかご漁業CPUEを指標値として判断すると、2025年（令和7年）は31.0kg/隻・日で資源水準の高中位境界（38.4kg/隻・日）を下回り、資源水準は中位、2021～2025年（令和3～7年）における資源動向は横ばいと評価しました。
- ・指標値について震災後は漁具数制限など操業の変化に留意が必要ですが、近年の漁の長期化からも本県漁場への加入が良好であると考えられます。



相双地区のかご漁業CPUE

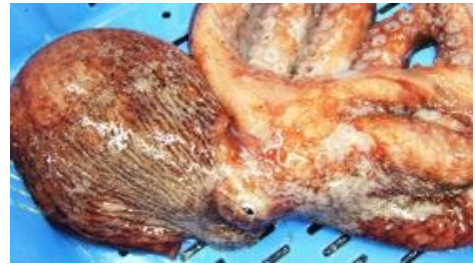
4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・自主規制として小型個体の再放流や漁具数制限（かご漁業）が地区単位で行われています。

ミズダコ（地方名：あまだこ）

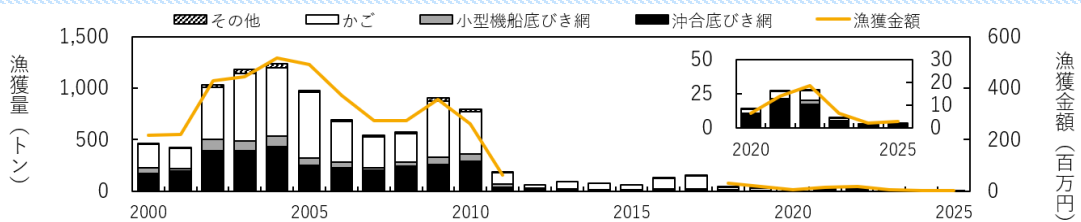
1 生態

- ・山口県沖、土佐湾以北の北太平洋沿岸全域に分布し、常磐海域においては、水深300m以浅の海域で分布がみられ、36°20' N以北の海域で分布量が多くなります。
- ・外套長25cm以上で成熟し、交接器を持つ個体がみられます。交接は12～2月に行われ、産卵期は同年の4～6月です。ふ化期は10～11月、翌々年の1～2月に体重100gまで、その年の12月には体重1.5～4.0kgまで成長します。
- ・主に魚類、甲殻類、貝類、イカ・タコ類を食べます。



2 漁業に関する情報

- ・主に底びき網、沖合たこかごで漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は2.9トン、金額は2.8百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2012年（平成24年）7月から再開されています。



漁業種類別漁獲量と漁獲金額の推移 * 2012～2017年まで相対取引のため金額データ無

3 資源の状態

- ・資源の水準：低位、資源の動向：減少
- ・調査船調査の結果では、震災後、重量密度が増加しましたが、2023年以降は資源水準が低い状態となっています。



相対重量密度指標の推移

4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・相双地区の沖合たこかご漁業では一度の水揚げで一隻あたり30個体までの自主規制がなされています。

ヤナギダコ（地方名：あまだこ、みずだこ）

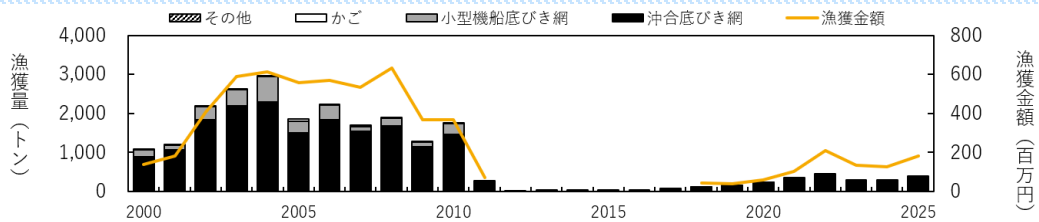
1 生態

- ・北海道および本州北部、サハリン、千島列島南部周辺に分布し、本県地先の海域においては、水深50～500mに分布します。1～6月は100m以浅へ分布を拡大しますが、9～12月は100m以深が分布の中心となります。
- ・外套長10cm以上（体重約0.8kg以上）で成熟し、交接器を持つ個体がみられます。交接は3～6月に行われ、産卵期は同年の7～8月です。
- 調査船調査で毎年採集される数g～数10gの小型群は、翌年9、10月には0.3～1.0kgまで成長すると考えられます。
- ・主に魚類、甲殻類、貝類を食べます。



2 漁業に関する情報

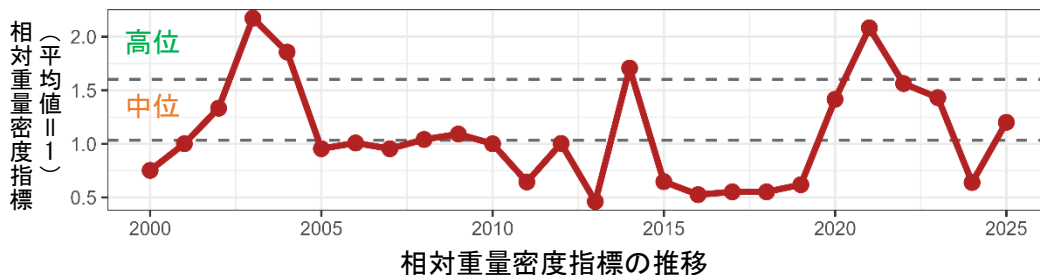
- ・主に底びき網で漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は386トン、金額は182百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2012年（平成24年）7月から再開されています。



漁業種類別漁獲量と漁獲金額の推移 *2012～2017年まで相対取引のため金額データ無

3 資源の状態

- ・資源の水準：中位、資源の動向：減少
- ・調査船調査の結果では、重量密度は2021年（令和3年）以降は低下傾向にありましたが、2025年（令和7年）は増加がみられたため今後の動向に注意が必要です。



4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・現在、実施されている取組みはありません。

イセエビ

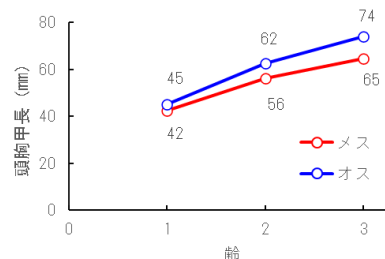
1 生態

- ・主に茨城県以南の太平洋、九州及び台湾、中国に分布していますが、近年の海況変動により岩手県～福島県での分布が報告されています。
- ・雌の腹肢に抱えられた卵からふ化したフィロゾーマ幼生は沿岸から黒潮の沖合域へ移送され約300日間に約30回の脱皮を繰り返し、プエルルス幼生に変態後、沿岸に着底、脱皮し稚エビになります。
- ・稚エビ以降の成長は水温や着底時期により違いがみられますが、頭胸甲長（雄・雌）は1齢で45mm・42mm、2齢で62mm・56mm、3齢で74mm・65mmにまで成長します。

＊「齢」：プエルルスとして着底後の推定経過年数。起算日は8月1日

- ・3齢で産卵し、産卵期は夏季です。
- ・貝類や棘皮動物、甲殻類、海藻を食べます。

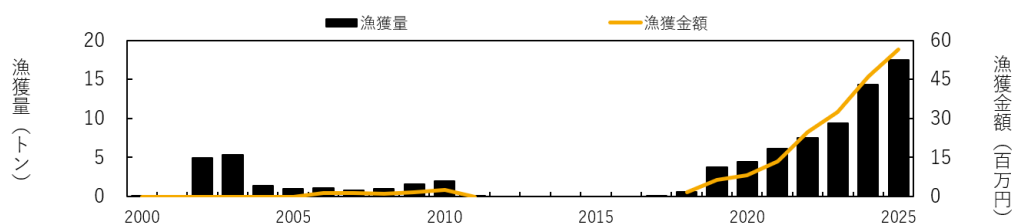
＊「複数体長組成データの解析によるイセエビの成長と齢別組成および加入の推定」（山川1997）より右図を作成



齢と頭胸甲長の関係

2 漁業に関する情報

- ・主に春から秋にかけて、主にいわき地区において刺し網で漁獲されています。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2017年（平成29年）8月から水揚げされています。
- ・2019年（令和元年）以降、漁獲量が増えており、2025年（令和7年）は17トン、56百万円でした。



漁獲量と漁獲金額の推移 ＊2013～2017年まで相対取引のため金額データ無

3 資源の状態

- ・資源の水準：高位、資源の動向：増加
- ・漁獲量の推移から、資源水準は高位で増加傾向にあると考えられます。

4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・現在、実施されている取組みはありません。
- ・本県の資源は他海域からの幼生の来遊により維持されている資源です。他海域で行われている産卵期保護や漁獲サイズ制限などの資源管理を検討していく必要があります。
- ・近年、黒潮続流の位置が南下しつつあり、本県沿岸への浮遊幼生の輸送量が減少することが見込まれるため、今後は資源量が減少する可能性があります。

ケガニ

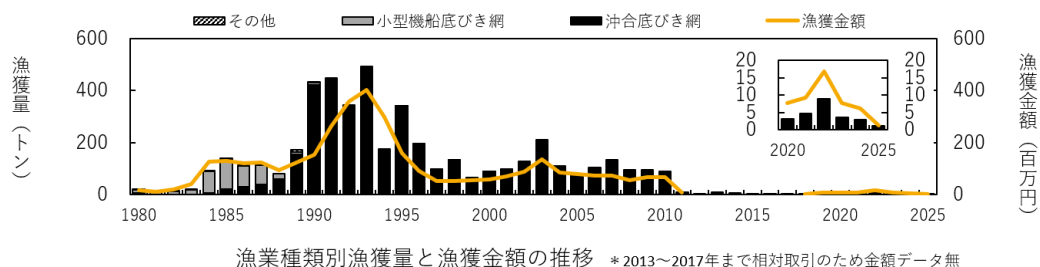
1 生態

- ・日本海、茨城県以北の太平洋沿岸に広く分布します。福島県沖では主に水深150～300mに生息します。季節的な深浅移動があり、春季は主に水深150m付近に分布します。
- ・メスは甲長40mm台（9齢期、ふ化後2.5年）から成熟します。交尾期は6～9月、ふ化期は2～4月です。
- ・主に甲殻類、魚類、多毛類を食べます。



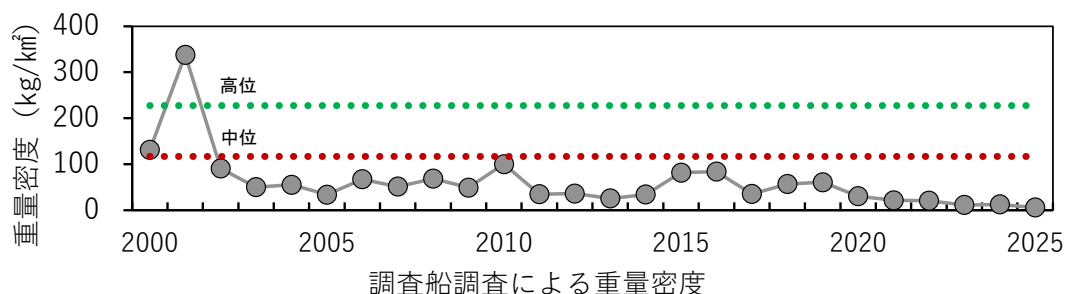
2 漁業に関する情報

- ・底びき網で漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は1.0トン、金額は1.3百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2012年（平成24年）9月から再開されています。



3 資源の状態

- ・調査船トロール調査による重量密度の推移から資源の状態を判断しました。
- ・2001年（平成13年）に338kg/km²と高い値を示しましたが、2002年（平成14年）以降は100kg/km²以下で推移しています。2025年（令和7年）は6.2kg/km²と、過去最低となりました。
- ・2025年（令和7年）の資源水準は低位で資源動向は減少と考えられます。



4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・県内のすべての漁協で、甲幅55mm以下の個体を水揚げしない自主規制が行われています。

ズワイガニ

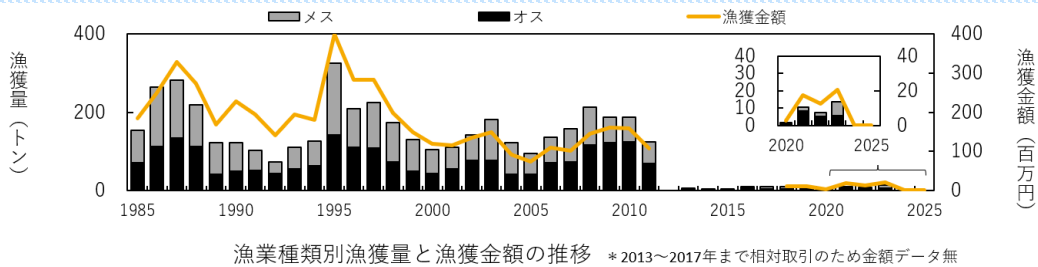
1 生態

- ・日本海、オホーツク海、ベーリング海、アラスカ沿岸、犬吠埼以北の太平洋に分布します。太平洋北部では水深150～750mに分布し、主な漁場は茨城～金華山沖の水深400～500mです。
- ・オスは甲幅105mm以上、メスは甲幅75mm以上になると全て成熟します。産卵期は冬～春とみられます。甲幅約20mmの個体が漁獲対象となるまでに、オスでは5～6年、メスでは4～5年かかると推測されます。
- ・主に甲殻類、魚類、イカ類、多毛類等の底生生物を食べていると考えられます。



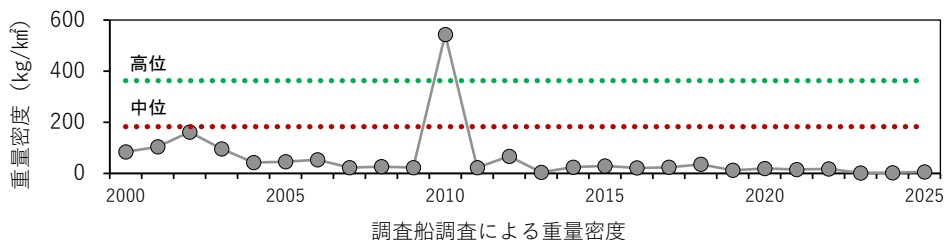
2 漁業に関する情報

- ・底びき網で漁獲されています。
- ・2025年（令和7年）に水揚げはありませんでした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛により水揚げはありませんでしたが、2013年（平成25年）1月から再開されています。



3 資源の状態

- ・調査船調査によるズワイガニ重量密度は、2010年（平成22年）に543.4 kg/km²と非常に高かったことから、それ以外の年は資源水準が低位に区分されています。
- ・2025年（令和7年）の資源水準は低位で、資源動向は減少傾向にあります。
- ・2025年（令和7年）漁期のズワイガニの漁獲は、従来ズワイガニが分布する海域で操業が行われたにも関わらず漁獲がなかったことから、非常に低い資源水準であると考えられます。



4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・農林水産省令により漁期（採捕できる期間12月10日～3月31日）と未成熟がにの採捕制限（甲幅8cm未満のオス、腹節の内側に卵を有しないメスの採捕禁止）が定められています。
- ・国のTAC（漁獲可能量）制限により、水揚量の総量制限が実施されています。2026年（令和8年）漁期（7月～翌年6月）における太平洋北部系群のTACは20トンです。
- ・相双漁協相馬原釜地区では自主規制により、1隻1日の水揚量が制限されています。

ツノナシオキアミ（地方名：いさだ）

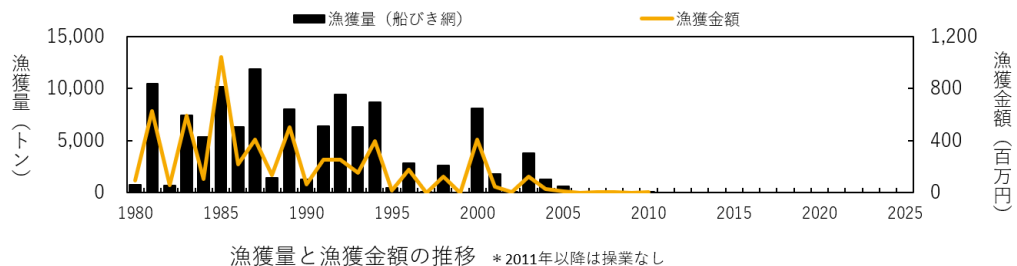
1 生態

- ・日本海及び駿河湾以北の北西太平洋海域に広く分布しています。
- ・本種の寿命は1年と考えられています。体長約18mmで成熟し、主産卵期は3～5月です。
- ・主に珪藻、カイアシ類等の動植物プランクトンを食べます。



2 漁業に関する情報

- ・船びき網により漁獲されます。
- ・2026年（令和8年）現在、操業は行われていません。
- ・操業が行われていた2010年以前について、1987年（昭和62年）には11,863トンの漁獲量がありました。
- ・オキアミは餌料利用への需要が主体で、流通における在庫状況で単価が左右されるほか、漁期が重複する他の操業対象種（こうなご等）の漁況で着業時期や操業隻数が増減することから、年により漁獲量が大きく変わります。



3 資源の状態

- ・2011年（平成23年）以降、福島県での漁業が行われていないことから、現状では福島県沿岸域における資源状態は把握できていません。

4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・岩手県、宮城県、茨城県及び福島県の4県で年ごとに操業期間と各県の漁獲枠を決めて操業を行っています。

キタムラサキウニ

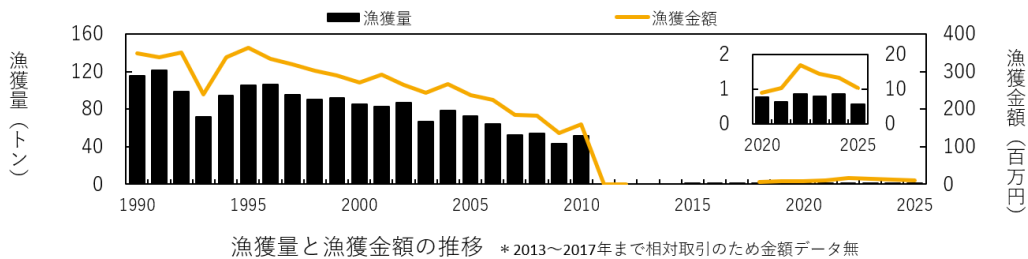
1 生態

- ・相模湾以北の太平洋岸海域と対馬以北の日本海岸海域の沿岸岩礁域に生息します。
- ・採捕制限の殻径35mmを超えるには、1～2年かかります。成熟殻径は40～45mmで産卵期は7～10月です。寿命は、25歳程度と考えられます。
- ・主に海藻類を食べます。



2 漁業に関する情報

- ・素潜りや潜水器を用いて漁獲され、貝焼きに加工し出荷されています。
- ・2025年（令和7年）の漁獲量は0.5トン、金額は10百万円でした。
- ・2011年3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2015年（平成27年）7月から操業が再開されています。



3 資源の状態

- ・資源水準：不明 資源の動向：不明
- ・漁業者が1日あたりの漁獲量を制限していることから詳細な資源状態は不明ですが、一部の地先で資源量が著しく減少しています。
- ・2021～2025年の調査では、発生水準の高い年級群のうち、成長の早い個体から漁獲利用されており、2018年級群が漁獲主体でした。なお、近年は発生水準の良い年級群が見られず資源水準が低いため、資源の利用方法に注意が必要です。

4 資源管理の取組・その他のトピック

- ・多くの地先で1人1日あたりの漁獲重量を自主規制しています。
- ・一部の地先で移植や駆除等により密度管理を行っています。
- ・福島県漁業調整規則では禁漁期（毎年10月1日から翌年4月30日）と漁獲サイズの制限（殻径（棘を除く。）3.5cm以下）が規定されています。
- ・主産地であるいわき地区では、漁業者が「貝焼き」に加工して出荷しています。いわき市の「ウニの貝焼き」は文化庁から百年フードに認定された郷土料理で、生殖腺をホッキガイの貝殻に盛り付けて蒸し焼きにした加工品です。
- ・いわき地区では震災以降、ホッキガイの貝殻の大きさや生殖腺の盛り付け量などの規格を統一して出荷しています。
- ・2020年（令和2年）から、いわき地区でムラサキウニの生息が確認されており、一部の地域ではキタムラサキウニ漁場に生息する個体を駆除しています。